

人間機関車・呉昌征

ごしょうせい

台湾初の日本プロ野球選手が生き抜いた時代と生涯

岡本博志 著

呉昌征

甲子園大会で裸足のプレーで活躍

1937年に東京巨人軍

1944年に阪神タイガース

野球殿堂入りした呉昌征の激動の人生 感動のドキュメント小説



時代が変わっても甲子園の夏は昔も今も変わらない。お盆の頃には猛暑が甲子園を包む。

甲子園球場の外野席のかなたから、力強い夏雲の塊が紺碧の天空に向かって立ち上がっていた。その日、観客席は満員の観衆で白一色に輝いているように見えた。

1931年8月21日、全国中等学校（今日の高校）野球選手権大会の決勝戦。7年前の1924年に完成した甲子園球場では、5万人の観客が声援を送り、場内には熱気があふれていた。

この夏の甲子園第17回大会の決勝に進出したのは、中京商業と嘉義農林だった。中京商業は1923年の創立、対する嘉義農林は正式名を台南州立嘉義農林学校と言い、台湾の農林業を振興するためにエリート人材を養成する目的で1919年に創立された。新参の両校が対戦する決勝戦はそれだけで話題充分であったが、その一つが台湾代表であることがさらに全国野球ファンの関心を呼んだのである。

回が進むに従い、戦前の予想通りに中京商業が有利に試合を進めていた。三回裏、中京が連打とタイムリーヒットで2点を先取した。続く四回にも2点を加えた。その後は両校投手の力投が続き、投手戦の膠着状態のまま回が進んだ。中京は本大会から球史に残る3連覇を成し遂げた吉田正男投手が4安打に抑える好投、対する嘉義農林の四番打者で主将の呉明捷投手も力投していた。嘉義農林の敗色が濃くなってくると、白いユニフォームの胸に書かれた「KANNO」の文字を読んだ観客が「カノウ」、「カノウ」と大合唱の声援を送り始めた。

試合はそのまま4対0で終了した。翌日、全国紙が嘉農の健闘を大きく報道し、一紙は「天下嘉農」（嘉農ナンバーワンの意）と讃えた。

試合後、新聞記者が嘉農の近藤兵太郎監督にインタビューをした。近藤監督は松山商業野球部出身、その後台湾に渡って嘉農の教練(軍隊式の体育教師)になり、長く部員から慕われた監督だった。

「それにしても選手たちのスタミナはすごかったですね。甲子園まで4日の長旅と、この暑さによく耐えましたね」

「そりゃ、大したことじゃありません。何しろ部員は午後2時間の農業実習で汗をかいてから、日が暮れるまで練習しているのですから、むしろ回毎に休憩がある試合の方が楽だったでしょう。暑さなんて問題じゃない。北回帰線の南にある熱帯の嘉義はもっと暑いですから。選手の中には甲子園は涼しいなんて冗談半分に言っていたのがいましたよ。ワッハッハハ」と監督が答えた。

監督は急に真剣な表情になって記者に話を続けた。

「嘉農の野球部は台北のチームとは違う。台北のチームは全員が台湾在住の政府関係者や会社員の日本人の子弟であるのに対し、嘉農は日本人、台湾人、原住民の三者が渾然一体になったチームで、単に南部が台北より強くなったというだけではないのですよ。私はチームに三者一体の嘉農精神を教えています。親が誰かなんて関係ありません」

嘉義は北回帰線が通る位置にあり、その南は熱帯になるのだ。嘉義では梅雨明けの5月からは毎日暑い日が続く。

嘉農チームはスタッフを入れて総勢18人が、嘉義駅を出発したのは8月9日の朝9時32分だった。駅前広場に集まったおよそ千人の市民に見送られる中、蒸気機関車が祝砲のように三度汽笛を鳴らしてゆっくりと動き出した。急行列車で基隆まで約300キロ、8時間かかり、一行が港町基隆に着いた時には陽暮れになっていた。当時日本に渡る台湾航路の基点として栄えていた基隆、選手たちは初めて見る港町の賑わいに驚かされた。

翌朝、誰もが生まれて初めて乗る大型定期船の大和丸が岸壁を離れるに従い、故郷の陸地が遠ざかることに不安と感傷を覚えたが、間もなくどっと疲れが出て、三等室のベッドの上で眠りにおちた。神戸まで1500キロの長旅には2昼夜と半日58時間かかり、船が最初の寄港地門司港に着いたのは13日の午後だった。

大和丸は港にしばらく停泊した後、門司からの乗船客を加えて夜中の瀬戸内海を神戸に向かった。翌朝、船が神戸に近づくと、六甲山の麓から海に沿って広がる美しい景色に、部員たちは目を見張った。こうして8月14日、宿舎となる高校（旧制）の寮に入った。

15日から二日間の練習をした。

初戦は17日、神奈川商工を3：0で勝つと、札幌商業、小倉工業を退けて快進撃し、決勝に進出した。出場前には無名であった嘉農は一躍全国に知られるようになっていた。

嘉農チームが嘉義に帰ると、地元はその凱旋を熱狂して迎えた。それまで8回の台湾大会では台北一中、台北商業など台北代表が甲子園に出場してきたので、南部から初めて嘉農が台湾代表になった時に地元は興奮に包まれた。加えて初陣で甲子園の決勝戦まで進出した嘉農チームを、はるか日本から嘉義駅に降り立った郷土の英雄たちを、大群衆が歓迎した。

「天下嘉農」、「天下嘉農」と大合唱があたりに響き渡った。嘉義市民にとって嘉農チームは甲子園では二番であったが、彼らの心の中では一番だった。

この群衆の中に、新入生として嘉農野球部に入って間もない呉波（後に昌征に改名）がいた。準優勝チームの大黒柱として英雄になった呉明捷と同姓の呉波こそ、日本のプロ野球に入った初の台湾選手であり、戦前の草創期から戦後まで21年間も活躍した。プロ野球で初めての20年選手になった。

半世紀振りに蘇った記憶

2006年2月、スポーツ作家の私は別件で台湾に出張していた。南部の嘉義に滞在していた時、昼食を取るために友達の案内で水餃子が美味しいという店に向かっていた。偶然、嘉義球場の前を通った時、車を停めてもらおうと、球場に歩いて行った。球場の正面に嘉義農林が甲子園大会で準優勝したことを讃える顕彰碑があった。

「あっ、そうだ。嘉義農林と呉昌征！」と、遠い日の記憶が突然蘇った。50年以上昔の記憶を思い出したのだった。

私が終戦後間もなく小学校に入った頃は、阪神タイガースの黄金時代であり、呉昌征は外野手、トップバッターとして活躍していた。当時、タイガースの一番から五番までの打順は呉昌征、金田正泰、別当薫、藤村富美男、土井垣武だった。70歳以上の世代なら、このダイナマイト打線と呼ばれた選手たちの名前を懐かしく思い出さだろう。彼らはメンコとブロマイドのスター選手だった。メンコは花札くらいの大さきの厚紙カードで、選手の写真が印刷されていた。野球好きの仲間たちと、板の上に置いたメンコを自分のメンコで叩きつけ、相手のメンコを裏返すと自分のものにできる遊びに熱中した。プロ野球通の一人から呉昌征が台湾人であることを聞いていた。

私は小学校の広場野球の時代から大学まで野球部に属し、卒業後も野球マニアで、最後は病がこうじて野球小説を書く作家になっている。

「それにしても、生涯野球から縁を切れなかったな」、と台湾からの帰る機内で回想にひたった。

私は地方の町で小学校に入った。1947年に六三三制の新学制が実施され、尋常小学校が新制小学校に変わって2年目のことだった。

すでにプロ野球の人気は町の子供たちにも伝わっていた。放課後に帰宅すると、晴れの日には広場で野球、雨の日には仲間が軒下に集まってメンコに熱中する野球漬けの毎日を過ごした。

私は仲間からプロ野球知識を得るうちに阪神ファンになっていた。仲間には巨人ファンが多く、川上哲治、青田昇、大友工、中尾碩志などスターのメンコが彼らの主流派だったが、私には阪神ダイナマイト打線の選手たちが憧れのスターだった。対戦する相手が阪神のスターのメンコを出してくると、気合いを入れて一発で裏返して相手のメンコを勝ち取った。こうして阪神のメンコを集めた。呉昌征という変わった名前が記憶に残った。

台南の小さな郷、橋仔頭の広場で子供たちが野球に興じていた。子供たちがはしゃぐ歓声があたりの巨木にこだましている。

春節と呼ばれる正月（旧正月）を迎えるために、橋仔頭社（神社）の境内も、うっそうと茂る楠の中を通る長い参道も掃き清められていた。神社では正月に柔道、剣道、弓道、相撲の試合が行われ、近隣の村を合わせても人口1万人足らずの地域から大人も子供も腕自慢が参加して競う。また、子供たちは漫画やおもちゃの絵が描かれたメンコ（日本のメンコより小さい）や凧揚げを楽しむ。

農家はサトウキビの収穫が終わった時期、正月の支度^{ねんこう}に忙しい。年糕と呼ばれる辛いおろし餅と甘い餅が特別につくられ、ほかに伝統の家庭料理がふんだんに用意される。子供たちは竜葵（野野菜のいため粥）が好きだった。

台南の正月は、冬と言っても気温は20度前後、好天が続く最高の季節だった。

台湾製糖の広大な工場敷地を取り囲んで整備された庭園には、山桜、羊蹄甲（桜に似ている）、馬纓丹（一つの花に三色の花弁）などが咲き乱れていた。敷地の一角に野球場があり、ここが野球少年たちの活躍場所だった。野球場の後ろには、荒野を切り拓いてつくられた広大なサトウキビ畑が果てしなく広がり、その中を時々サトウキビが工場に運ばれる長い貨車の列を小型の蒸気機関車が引いて走っている。絵に描いたようなのどかな田園風景だった。

呉昌征は大正5（1916）年8月26日、工場に隣接する台湾製糖の社宅で生まれた。5男2女の次男だった。父親呉福は役人をしていた台北から郷里である台南に帰って、台湾製糖橋仔頭工場の現場監督者として転職していた。呉少年にとって、野球を自由に楽しめる環境に恵まれたことが幸運だった。

台糖は、社員とその家族のためにスポーツ施設をつくり、スポーツ特に野球に力を入れた。広大な敷地に社宅群があり、社員の厚生施設である台糖クラブ、公式テニスコート、台北に次いで二番目の野球場を持っていた。社員の子供たちはどこにでもある広場で野球を楽しんでいたが、チームの人数がそろくと、野球場で試合をする機会を与えられた。台糖は社員の家族のためだけでなく、地域のスポーツ振興に力を入れ、用具を購入して支援していた。橋仔頭は全体が台糖の地域社会であった。

歴史を振り返ると、日清戦争に日本が勝利後の明治28年（1895）、下関条約によって台湾を日本領土化してわずか数年しか経たない明治33年には、台湾南部開発の第一歩として製糖工場が建設された。官営八幡製鉄所でさえ建設されたのはその1年後のことであるから、台糖の設立が早いことに驚く。台北から高雄までの縦貫鉄路が完成するのも明治41年のことで、台湾の北部と南部がつながる以前に、日本政府は未開の南部開発に着手した。当時の南部は雑草が一面に茂り、風土病がはびこる荒野だった。昭和5（1930）年に完成した烏山頭ダムから引かれる農業用水を使い、不毛の地、台南平地を一大農地に変え、台糖も一帯にサトウキビ畑を栽培した。台糖は

原料のサトウキビを輸送するために、敷地内だけではなく、嘉義駅まで鉄道を敷いた。小型蒸気機関車が引っ張る一連の貨車に客車をつなぎ、地域住民の利用に供した。台糖鉄路と呼ばれた路線には時刻表があった。

この地域では着実に実力をつけてきた嘉義農林を頂点として、子供たちの間でも野球が盛んだった。呉が尋常小学校の高等部に進んでいた頃、身長160センチを超える大柄な呉少年に注目していた嘉義農林野球部の選手がいた。数年後に甲子園準優勝チームで主力選手の一人として活躍する小里初雄だった。呉少年は外野を駆け回り、左投げで楽々と遠投をしていた。左打席から早いスウィングで誰よりも遠くへ打球を飛ばした。ある日、彼は呉少年に声をかけてキャッチボールの相手をした。自己流のフォームながら伸びの良い球を投げることに驚かされた。呉少年に天性の素質を見出した小里は機会がある度に投球の指導をした。

小里が問うと、呉少年は嘉農に進学して野球部に入りたいと答えた。ところが、呉少年が嘉農(当時の旧制中学と同等)に入学するには敷居が高かった。彼が小学校の高等部を卒業した時、最初の入学試験に合格できなかった。やむなく、彼は遊び仲間でテニス選手をしていた許文淵(今も健在)と二人で隣町岡山の補習校に列車で1年間通った。許は小学校の秀才だったが、難関の師範学校受験に失敗していた。許とは対照的に、体育と音楽だけが優であった呉は、授業以外に通学の列車でも許から多くを学ぶ機会を得た。

翌年4月、学力検定と体力検定の両方に合格した呉は嘉農への入学を許可された。

呉昌征が生まれ育った当時の台南について話をしてみよう。

台湾は、九州とほぼ同じ面積の本島が南北に細長く広がっている。中央部から東側、つまり太平洋側には、中央山脈が南北を貫いて走っており、国土の三分の二は山岳地帯である。

これに対し、西側、つまり台湾海峡側は平野であるが、特に嘉義台南平地(嘉南平地)と呼ばれる大きな平野がある。嘉義は北回帰線上にあるので、南部の大部分が熱帯に属する。農業に欠かれない川は、何本かあるにはあるが、どれも水量が不安定な上に、農業用水が整備されていなかったもので、農業開発の障害になっていた。

台南を一時占領していたオランダも、北部をわずかに統治していた清朝も、嘉南平地の開発には手をつけることがなかった。当時から台湾南部の住民は貧しかった。それどころか、台湾に移住民を出してきた大陸の福建省も農民は総じて貧しかった。

南部には台北に置かれた清国出先機関の統治は及ばず、無政府状態に置かれ、大陸からの移住民と、山地と東海岸に住んでいた原住民の村落がばらばらに存在するだけだった。そのため、生活の目標も持たされない住民の間にアヘンの風習がはびこり、社会の治安も乱れていた。伝染病や風土病も絶えることがなく、不毛の土地であった。

ちょうど、全土の統治政府がなかった点では、松前藩だけが地方政府の形であっただけで、函館以北は原住民の村落があった明治以前の北海道のようなものだっただろう。

1895年、日本が統治し始めた時には、全土の人口が300万人くらいだったという。因みに、当時の日本の人口は、約3600万人であった。

台湾総督府は当初抗日運動の討伐に追われていたが、行政組織が確立するとともに、第四代の子玉源太郎総督と民生長官の後藤新平の時代になって本格的な台湾開発が始まった。

1902年、高雄県橋仔頭(現在は橋頭)に設立された台湾製糖が操業を始め、南部開発の先駆けになった。これによって、周辺にサトウキビ畑が開発され、住民に広く雇用機会が与えられた。

1908年には縦貫鉄路が完工し、基隆、台北から高雄までの往来が活発になった。台湾の経済が初めて一体化したのである。

1906年、総督府は、南部に農業振興と並行して林業を起すために、嘉義駅から阿里山系(最高峰は大塔山2665m)を2250mまで登る阿里山森林鉄路の建設に着工した。1912年に全線72キロが開通すると、大森林から台湾ヒノキが搬出され、日本でも広く使われて南部経済に大きく貢献するようになった。

今日では、急峻な区間をループとスイッチバックで3時間半をかけて登る阿里山鉄道は、観光鉄道としても世界に知られる。

1919年に設立された嘉義農林学校は、南部の農業と林業を支える専門技術者を養成することが目的であった。

総督府は、さらに農地開拓のために大事業を進めた。

日本政府は台湾の水利事業を推進するために、28歳の八田興一を工事責任者として総督府に派遣した。八田は金沢の四高から東大工学部に進学、水利を専門にする土木技術者だった。

彼は先ず台北の南、桃園台地の灌漑のために調査を行い、今日の石門ダムの建設に取り掛かった。ダムを1916年に着工し、5年後に完成させた。これにより台地に農業用水路が一带に敷かれることにより、3万5千ヘクタールの農地が生まれた。日本で最大の農地開拓とされる八郎潟干拓地の2倍の広さになる。

彼はさらに大規模な灌漑工事を南部で行った。10年かかった烏山頭ダムは1930年に完成した。貯水量1億6千万トンのダムは、当時世界でも有数の巨大規模であった。これによって、不毛の嘉南平野が15万ヘクタールの農地に生まれ変わり、米とサトウキビの大生産地になった。

今日でも、台湾では農業振興の功労者として名をとどめる八田は、1942年、輸送船が太平洋上でアメリカの潜水艦によって撃沈され、56歳の生涯を終えた。後年、夫人が烏山頭ダム湖に投身自殺をするという悲劇が起き、夫妻を偲ぶ地元の人たちによって夫妻の銅像と墓が湖畔に建てられている。

呉昌征は台南地方が豊かになりつつある時代に生まれ、育ったことは幸運だった。

日本から台湾に野球が伝えられたのは、1906年のことである。

日本が明治時代になって6年目の1873年には、アメリカ人教師から野球がすでに紹介されていたが、日本では正岡子規によって野球の名称が与えられ、旧制一高に野球部が組織された1895年が日本の野球元年とされる。

日本で学校が野球の原点になったように、台湾でも総督府中學校（後に台北一中、現在は建國中學）の田中敬一校長が棒球隊（野球部）創設に尽力した。そのため田中校長は台湾の「棒球之父」と呼ばれる。

台北の中學校と専門学校で組織された野球は、その後南部に広まり、南部の実力が向上していく基礎の環境が整い始めていた。

1923年に初めての「全島中等學校野球大會」が台北で開催された。同時に、この優勝校が甲子園の「全國中等學校野球大會」（夏の甲子園）に台湾代表として出場することになった。夏の甲子園は第9回を迎えていた。

全島大會の第1回から第8回までは、台北一中、台北商業、台北工業の台北勢が連続して優勝した。風向きが大きく変わったのは、第9回からだった。

この年、南部代表の嘉義農林が初めて全島大會に優勝し、第17回の甲子園大會に駒を進めた。そして、決勝戦まで進出したのである。

それ以後、南部優勢の新しい時代が始まった。

- 第10回 台北工業
- 第11回 嘉義農林
- 第12回 台北商業
- 第13回 嘉義農林
- 第14回 嘉義農林
- 第15回 嘉義中学
- 第16回 台北一中
- 第17回 嘉義中学
- 第18回 台北一中
- 第19回 嘉義農林

嘉義農林は第19回に優勝したが、この年、1941年から戦争のために甲子園大会が中止になり、出場することができなかった。

呉が嘉農野球部に入った時、猛練習に驚いた。

嘉農では早朝から講義があり、午後には2時間の農業実習が必修だった。その後で日が暮れるまで野球部の練習があった。週末も練習が行われた。呉は高雄県台南の自宅を離れて嘉農の学寮に入った。学寮では一室に18人が入り、大型の蚊帳の中に雑魚寝する10畳と、勉強部屋の10畳に分かれ、野球部以外の生徒とも一緒に寝起きする集団生活にすぐ慣れた。もともと呑気な性格に加えて、予習復習をする体力が残ってはず、夕食後は眠りに落ちることが常だったので、雑魚寝も気にならなかった。

呉が入学してから4ヶ月後に嘉農は台北の中学を破り、台湾選手権に初優勝した。台湾代表として甲子園に出場、嘉農の黄金時代が続くことになった。近藤平太郎監督の下で猛練習を積んでいた嘉農野球部は、それまで強かった台北の各校を凌ぐようになった。近藤は松山商業野球部の出身、嘉農の教練の教員を務めていた。名監督の指導を得て、呉は南風の時代に乗ったのは幸運だった。

1933年8月4日の夕方、嘉義駅の待合室とプラットホームにはあふれるばかりの学校関係者と市民が詰めかけていた。

嘉義農林野球部が再び台湾代表として、第19回全国中等学校野球選手権大会、夏の甲子園大会に出場するため、旅立つところだった。準優勝した年から2年振りだった。前年には台北工業に敗れて涙を飲んだので、市民の期待がいやがうえにも高まっていた。

9時30分、蒸気機関車の汽笛が二度、三度高々と鳴り、急行列車は基隆に向けてゆっくり走り始めた。大群衆の声援の声がホームいっぱい響いた。

後で顧みると、この旅立ちが、呉にとって運命を決める人生の出発点になった。

台湾航路の定期船に乗る基隆まで8時間40分、呉には初めての長旅に、ほとんど眠れなかった。甲子園を思い描くと興奮せずにはいられなかった。甲子園初出場組も同じだっただろう。

登録選手14人の中に前々年に準優勝したチームから4人が残っていた。その一人平野保郎は決勝戦でエース呉明捷に次ぐリリーフ投手してマウンドに立った経験があった。平野はまた左翼手でフル出場しているので、経験は充分だった。優勝は時の運、それよりも一つでも多く勝ちたかった。

翌朝、5時52分に列車が基隆駅に到着した。駅を出ると、道路をはさんだ真向いに港があり、乗船する吉野丸がすでに棧橋に停泊していた。呉は初めて見る巨船の姿に驚き、10時の出港が待ち遠しかった。

吉野丸は定刻に出発した。ドラの音とともに、船が棧橋を離れてゆくと、基隆の町が陽を浴びて美しかった。

17歳の呉に初めての船旅、船上から基隆の町を見ながら台湾を離れてゆくことに感激でいっぱいだった。思わず目頭が熱くなった。一時、甲子園も野球も脳裏になかった。《船出、船出》と独り言をつぶやいた。

間もなく近藤監督が選手たちを甲板に集合させた。船内の生活に注意を与えた後、監督が話を締めくくった。

「よいか、優勝や準優勝は時の運だ。優勝など忘れろ。我々の目標は先ず一つ勝つことだ。前回のチームに比べると、投手力と打力は落ちている。しかしだ、変わらないのは守備力と嘉農精神だ。一点を守って、守って、守り抜く。船内ではいつもダッシュとフットワークの運動を続けよ。個人では常にボールの握りを鍛えることだ」

最初の寄港地門司まで1300キロ、58時間の長い航海は始まったばかりだった。

当時、台湾航路は、1939年に日本郵船に合併されるまで、近海郵船が運航していた。使われていた吉野丸、大和丸、朝日丸はいずれも9000トンから9800トン、最高速度18ノット(時速33キロ)の優秀船だった。基隆、門司、神戸の間を5日毎に運航されていた。

三等で片道運賃が20円で、往復の40円は当時の大学卒初任給が月40円の時代であったから、三等と言えど庶民には高い運賃だった。ただ、船の場合、三食が運賃に含まれていた。

船内では、選手たちは二段ベッドが置かれた三等船室で寝起きした。日が経つにつれ、呉も他の選手たちも初めての航海に慣れて熟睡できるようになった。

ミーティングは広い甲板の一隅で行われた。沖縄の島々が見えると、その度に選手たちはデッキに駆け寄った。九州の大きな陸地が見えた時には、選手たちは歓声を挙げた。

近藤監督は選手の重圧を取り除くように、車座の中で自分の松山商業時代や前回の甲子園出場について優しく話して聴かせた。教練の先生、野球部監督としての怖いイメージはなかった。

近藤は、例によって、三者融合の嘉農精神を説いた。

台湾人、原住民、日本人の三者が融合するチームは、甲子園出場校の中で唯一だ、と。

当時、台湾では大和精神が強調されていたが、近藤はめったに使わなかった。彼には嘉農精神がすべてであるようだった。

基隆を出発してから3日目の朝、船は日本海から関門海峡に入り、8日の午後2時に門司の棧橋に接岸した。最終目的地神戸に出港する午後6時まで、選手たちは上陸して港の周辺を散策して楽しんだ。

船が門司港の岸壁を離れ、瀬戸内海を航行した。陽が沈むと、船の両側に見える町の灯りにも退屈して選手たちはデッキから船室に引き揚げた。

翌朝、目が覚めると、陽はとっくに高く上がっていた。両側に本州と四国の陸地が見えていた。デッキの船べりに集まった選手たちの一人が、

「あれは四国の半島か、島なのか？」

「あれは淡路島だよ」

と、いつの間にか来ていた近藤監督が言った。

「澎湖島くらいの大きさですか？」

「いや、もっとでかい。多分、澎湖島の4、5倍はあるんじゃないか」

「先生の出身地の松山は近くですか？」

「もう夜のうちに通り過ぎたよ。松山はずっと南の方にある」

神戸が近づいた。六甲山の麓から海沿いに広がる神戸の町並みが美しかった。甲子園の緊張が彼らを包んでいた。

8月9日午前11時、嘉義を出発してから4日目、吉野丸が神戸港の棧橋に接岸した。一行は西宮にある高校(旧制)の寮に入った。

高校のグラウンドで調整した後、甲子園で割り当てされた公式練習の日が来た。

呉など初めて甲子園球場の中に入った選手たちは驚いた。

「でかい」、「でかい」の言葉を連発した。当時は5万人収容の甲子園は世界最大級の競技場と言われたのだから、選手たちの驚きは無理もない。

練習を始めて間もなく、呉は靴ずれを起こした。基隆で選手たちに支給された新しいスパイクシューズが、硬かったのである。呉は早めに対応して靴底の敷革を取り除いたが、それでも痛みが取れなかった。そこで、練習は裸足のままですることにした。

前々年度の準優勝校である嘉農は名がよく知られていた。取材に来ていた新聞記者にとっては、裸足でグラウンドを駆け回る呉選手は格好の取材対象にされた。

翌日の新聞には、彼を「裸足の人間機関車」と呼んで面白半分の記事が出た。この後、プロ野球に入ってから「人間機関車」は呉の代名詞になった。

後に「人間機関車」の呼び名は、1952年のヘルシンキ・オリンピックにおいて、5千メートル、1万メートル、マラソンの3種目で金メダルを取ったチェコのザトペックに与えられるようになった。

嘉農は、1回戦の二日目に松山中学と対戦した。準優勝チームで左翼手であった平野保郎がエースだった。平野は強打の松山中学に打ち込まれ、敗色が濃くなってから左の呉が中堅手から救援に登板した。10対1の完敗に終わった。

松山中学は準決勝まで勝ち進んだが、前評判が高かった平安中学に敗れた。もう一方の準決勝こそ、球史に残る名勝負になった中京商業と明石中学の対戦だった。

明石中学のエース楠本は、前年の大会で一躍名を知られた剛球投手で、準決勝戦まで3試合をすべてシャットアウトしていた。他方、中京商業の吉田投手は前々年の決勝戦で嘉農を4対0でシャットアウトして優勝に導いた。中京は前年の大会でも優勝し、この大会には3連覇がかかっていた。

台湾に帰る船が発つ前日、嘉農の選手たちはこの歴史に残る試合を観戦した。両チームが無得点のまま、延長戦に入った。試合は延々と続き、容易に点が入らなかった。ついに、25回の裏、中京が1点を入れて勝った。

決勝戦では平安中学を2対1で破り、3連覇の偉業が成し遂げられたのだった。

＜中京商業のエース吉田正男は、春と夏の大会に6回連続で出場し、23勝3敗の投手戦績を残した。当時は、中学または同等の専門学校は就学5年であったため、最高で春夏10回の甲子園出場機会があった。

吉田は中京卒業後、明治大学に進学した。明大では外野手として、六大学野球で最初の4連覇に貢献、明大黄金時代の主力選手になった。

明大卒業後は、藤倉電線に就職、投手として都市対抗野球で活躍、1939年には優勝し、最高殊勲選手の橋戸賞を獲得した。

この年、郷里の名古屋に帰り、中日新聞に転職、スポーツ記者になった。どこでもあり余る優勝経験に恵まれ、実力と強運の持ち主であったにも関わらず、吉田はプロ野球選手になることはなかった。

1992年、野球殿堂入りした。〉

初戦で敗退した嘉農チームは、帰路についた。嘉義までは長い、長い旅だった。

呉はまだ2年生だった。《オレは戻ってくるぞ。必ず甲子園に戻ってくるぞ》と何度も口にした。彼はこの時、彼の素質を見抜き、嘉農への入学を支援した小里の言葉を思い出した。小里は、「甲子園には魔性が潜む。その魔性が何度でも甲子園に呼ぶんだよ」、と。

呉には、甲子園、そして野球は、いよいよ人生の重大事になっていくことを、自身、どこまで分っていたか。

翌年の春と夏には、台湾代表戦で台北勢に敗れた。

呉が4年生の春と夏に、嘉農は甲子園に戻ってきた。選抜大会では初戦敗退したが、夏には準々決勝に進出した。

呉が5年生になった最後の機会、夏には2回戦で敗れた。

春夏合わせて4度甲子園に出場し、外野手と救援投手として活躍した呉波(当時の姓名)は、「人間機関車」の呼び名とともに、攻・守・走のバランスが取れた選手として、大学からもプロからも注目される有名選手になっていた。

私は2007年5月に嘉義農林校友会のOB数人に案内されて、準優勝チームで唯一の生存者である蘇正生を、高雄の自宅に訪ねた。彼は中堅手で強打者だった。

94歳の高齢である彼は、娘さんが押す車椅子に乗って弱々しい姿で現れた。耳には補聴器を付けていた。それでもよく聴こえず、娘さんが彼の耳元で聴き取り、同行の嘉農OBから台湾語が日本語に通訳されてやっとのことで会話をすることができた。近況の話から、私が野球の話に移ると、その途端、彼は前かがみだった姿勢から背筋を伸ばすと、しっかりした声で、日本語を話し始めた。間もなくして、甲子園の言葉が出た時、かれは涙を流した。それから、呉明捷の名前が出た時、決勝で対戦した中京商業の吉田投手の名前を彼が話した時にも涙を流した。

甲子園とはそれほどまでに彼の人生で重い意味があったのか、と感嘆させられたが、甲子園出場がはるか遠い夢であった私には理解の域を超えていた。

蘇が涙したチームの主将、エース、四番打者であった呉明捷は、嘉義農林卒業後、一年遅れて早稲田大学に進学した。というのは、彼が卒業間際に突然腸チフスにかかったからだった。しかし、大過なく、治癒すると故郷の苗栗から日本に発った。

予科、本科を通じて6年間、早稲田の一塁手、四番打者として活躍し、首位打者にもなった。早慶戦ではサヨナラ本塁打を打って六大学のスター選手としていっそう有名になった。さらに、東京六大学で通算7本の本塁打新記録をつくった。この新記録は1957年に、後に巨人軍のスター選手になる立教大学の長嶋茂雄が、8本の新記録を更新するまで20年間も破られなかった。

呉明捷は卒業後、東京で台湾拓殖株式会社に就職し、野球から離れた。戦後は砂糖の輸入、外車の販売、中華料理店の経営などいろいろな事業を手掛けたが、事業の成功に欠かせない幸運に恵まれることがなく、どれもうまく行かなかった。1984年に72歳で病死した。彼は日本人女性と結婚し、妻と子供には日本人姓を名乗らせ、日本国籍としたが、自身は終生台湾籍のまま通した。

何が彼を野球から遠ざけたのか？

私は台湾で取材のある日、明捷の故郷である興隆村を訪ねた。客家族市民が多い苗栗市から車で40分の郊外にある村に、今も呉一族の本拠があり、親族が住んでいる。兄弟の家族が住む住宅を挟んで、呉家の祠堂がある。祠堂は二階建ての立派な建物で、遠くに住む親族が訪ねた時に泊まれる部屋があり、一階の壁には歴代家長の名票が掲げられている。21代の家長として明捷の名票があった。

一族は広大な田畑と山林の地主であったが、父親は苗栗の裁判所で代書をして、苗栗の市街地にも家を持っていた。当時小さな町では、代書というのは時に裁判官代理の仕事もする公職だった。明捷は当時では裕福な家庭で育ち、この町で幼少から過ごし、ここで小学校を卒業して嘉義農林に進学した。

戦後、東京で事業に苦労している間に、彼は何度も故郷に帰った。一族の土地にある池で好きな釣りをし、また、釣り船を黙々と手作りした。釣り糸を垂れながら考えた。

《家長としてオレは故郷に帰るべきか？》

《帰りたい。しかし、帰ってどんな仕事で家長として一族を支えるのか？》

《東京の生活に馴染んだオレが、こんな田舎の生活に順応できるのか？》

《客家語と日本語しかしゃべれず、国語の北京語が分からないオレが、台湾でどんな仕事をやれるのか？》

《せめて故郷に近い台北で仕事をしたい》

《台湾に帰るためには、日本で資産をつくらなければならない》

結局、いつも達する結論は、日本で資産をつくることだった。

彼はもともと台湾に帰ることを決めていたので、早稲田を卒業後、台湾で事業活動する台湾拓殖会社に就職したのだった。野球選手を職業にすることには、家長の身として多少プライドを気にしたかもしれないが、それよりも彼の人生計画に合わなかったのだ。しかし、彼の計画は終戦によって狂ってしまった。

もっとさかのぼれば、彼は一族の家長として農業を基礎とする事業をするか、あるいは農業技術者として役人になることを考え、近い台北の中学より遠い南部の嘉義農林に進学したのだろう。そして、野球選手としての素質を見出された。野球の花は大きく開いたが、野球が彼の人生を変えた。

戦後の彼は、家長として重荷を背負った人生をたどらざるを得なかったのである。

参考までに、客家族はもともと清朝の時代に圧迫されて、北部から南部に移住し、福建省の山間部に住む漢族集団であり、土楼と呼ばれる円形の巨大な集合住宅で知られる。土楼は南部の新参者として外部からの攻撃を防ぐために城壁を兼ねた集団住宅であったと言われる。

戦前に台湾に移住した少数派漢族の客家は、新竹や苗栗を中心に住んでいる。彼らが話す客家語は半分くらい台湾語に共通しているが、台湾では少数言語である。最近、客家語専門のテレビ局がつくられている。

中華民国の建国者孫文や中国改革開放の立役者鄧小平は客家族の出身である。

戦前、呉昌征と呉明捷のほかに、台湾人出身で嘉義農林から日本のプロ野球界に身を投じた呉姓のもう一人の選手がいる。その人、呉新亨は呉昌征の6年後輩だった。彼は他の二人と大きく異なる人生を送った。

ここで話はそれるが、当時の学制では、中学、中学と同等の専門学校は5年、高校と高等専門学校は3年、そして国立大学は3年が標準の就学期間であった。しかし、私立大学では、予科課程と本科が一体になっていた。このため東京六大学では東大野球部の選手は3年間他の5大学では5～6年間プレーしていた。

当時は全国で各種目の高校対抗戦が盛んで、「インターハイ」と呼ばれ、その中で野球は人気が高かった。今日、新制高校の総合体育大会が「インターハイ」と呼ばれるのはここから来ている。

東大野球部の選手はほとんど高校で野球をやっていたから、期間の点ではそれほどハンディはなかっただろう。

さて、呉新亨は1924年、嘉義の隣り、朴子郷で生まれた。今日、朴子市は一帯のサトーキビ畑をつぶして嘉義県庁、大学、球場が立地するニュータウンになり、真新しい道路が縦横につくられている。近代的な町に変貌した。

新亨は家庭が大学生活を支えられるほど豊かではなかったので、嘉義農林を卒業後、戦局が悪くなりつつあった1943年にプロ野球の大和軍に入団した。呉昌征の活躍はよく知られていたから、プロ野球選手になることにそれほど不安はなかった。

彼は野球選手歴の始めに連続して大きな不運に見舞われた。

1942年、嘉義農林でエースとして最終学年の時、夏の甲子園の台湾代表を決める決勝戦では台北工業と対戦した。一日目は試合途中で雨が降って中止、二日目の再試合も試合開始後に中止。三日目の試合では、25回延長の末、6対5で優勝した。しかし、戦争が激しくなってきた影響のため、やっとのことで手にした台湾代表の栄冠は甲子園大会が中止になって報われなかった。

翌年、外野手として実力を認められた新亨は、阪神に移籍した呉昌征と入れ替わりに巨人軍に移った。この年、盗塁王を取った。地位が安定したのも束の間、戦局が悪化する中でプロ野球そのものが解散されてしまった。

戦後プロ野球が復活すると、新亨は巨人軍に呼び戻され、ようやく不運の連続パンチから解放されることになった。

その後、7年間巨人軍に在籍し、日本シリーズに2回出場した。しかし、戦前からの主力選手が戦地から帰ると、先発から外されることが多くなり、1952年のシーズンを最後に引退した。まだ28歳の若さで野球選手から足を洗った。

引退から3年後、思わぬ話が持ち込まれた。リーグが分裂して間もないパシフィック・リーグの審判部から審判として招請されたのである。彼は一度は野球と縁がない普通の生活から審判職に変わった。その後25年の長きにわたって審判を務め、最後には審判指導員になった。

野球選手としての素質から言えば、新亨は他の二人の呉に比べて劣っていたかもしれないが、最も平穏で安定した人生を送った。人生とはわからないものだ。

新亨は戦後に名前を萩原寛に変え、50歳の時に日本国籍になった。1997年、73歳で他界した。

卒業が迫っていた。進路を決めなければならなかった。

すでに、準優勝チームで投打の主力選手だった呉明捷から早稲田大学への進学を勧誘されていた。

呉波が進学に傾いていた時、近藤監督から呼び出しがあり、プロ野球の巨人軍から勧誘の話があることを知らされた。近藤監督は、巨人の藤本定雄監督とはともに松山商業野球部の出身で親しい間柄であったので、藤本監督から強い要請を受けていた。

年俸1500円(月給125円)が提示され、日本渡航のための支度金も出るという。当時、台湾製糖の初任給は一般職で20円、日本から派遣の技術者で40円だった。今日のプロ野球選手とサラリーマンの所得差を考えれば高給に魅かれるというほどではない。

恩師の説得には逆らえないものだ。彼は迷った。家族会議では父と兄が反対した。

「ボクは野球をやりたい。本気でやりたい」

「それなら、早稲田に行けばいい。寮にも入れるし、奨学金も出るというじゃないか」

「しかし、それでも生活費を家から送ってもらわなければならないよ」

「嘉農の学費と同じくらいだろう。そんなに家の負担にならない」

「早稲田に進学するとなると、大学予科3年と本科に6年も行かなくてはならないのだよ。弟や妹の学費もかかるから、もう家の世話にはなりたくない。ボクは充分してもらったから」

「プロ野球の収入もいつまで続くかわからんよ。プロ野球は去年できたばかりと言うし、事業として成功するとは限らん」

「野球を職業にするなんて、考えられないよ。日本では中学と六大学の野球の方が、人気の中心なんだ」

呉がここで静かに言った。

「近藤先生の話では、巨人は読売新聞が親会社だから、つぶれることはないと言っておられた」

それまで黙っていた母親が、心配でたまらないという表情で言った。

「野球をやりたいければ、台糖でやればいいのか？台糖も野球部を強くしたいという話だよ。社員として仕事の経験を積めることが大事だよ」

兄も言った。

「そうそう、野球を辞めてからどうするんだ？」

呉もこの言葉がいちばん利いた。彼自身、不安に感じていたことだった。

結局、すったもんだしたが、呉は近藤監督の勧めに従って決断した。もう流れに逆らえなかった。

呉はその後結婚するまで、毎月40円を親に送り続けた。台糖の社員にならず、プロ野球選手になったことに対する負い目の気持ちより、親を安心させたかったに違いない。

1937年8月の初め、呉は家族と友達に見送られて台南駅を発った。勇躍とはいかなくとも、呉には腹を決めた旅立ちだった。何度も通った基隆から三日間の航海後、神戸に昼前に着き、急行列車で初めての東京に向かった。呑気な性格の呉だったが、20歳の彼には不安でいっぱいの長い旅だった。窓ガラスの曇りを拭いて自分の顔を見た。

《生彩がない顔だな》と独り言をつぶやいた。

東京駅では、出迎えた球団職員に連れられて一歩外に出ると、巨大な赤レンガの駅舎に驚いた。

当時、東京の人口は670万人、日本の人口が3500万人の時代だった。

呉が入団した巨人軍は、1934年に創立された。

そのきっかけになったのは、読売新聞が31年に大リーグオールスターを招いたことが、一連のきっかけになった。ベーブ・ルースは日本でも有名であり、スターをそろえたオールスター・チームは圧倒的な人気を沸き起こした。

対する日本の代表チームは、東京六大学OBを中心に編成され、全国各地で18試合を行った。実力差があることに加えて、急編成の代表チームは全敗したが、静岡草薙球場の試合では、伝説になった沢村栄治投手の速球を大リーグ打者が打てず、1対0で惜敗した。

沢村はこの時17歳、速球と鋭いドロツプで9三振を奪った。ゲーリックに打たれたホームランの1点が決勝点になった。

当時、日本で野球王と呼ばれたベーブ・ルースの人気は大変なものだった。野球人気が高まる中、この年の12月に巨人軍の前身となる大日本野球倶楽部株式会社が設立された。読売新聞のほか、野球部を持つ全国の子会社が株主だった。読売新聞社長であった正力松太郎は個人株主として大金を出資した。

翌年、全国の子会社チームから選手を集めた新球団は、読売新聞の後援により渡米した。チームは128日間に全米63都市で109試合を行うという過酷なスケジュールだった。マイナーリーグ、大学、日系人チームを相手に75勝33敗1引分の戦績を残した。沢村は21勝8敗1引分(0-0)だった。

この渡米中に東京ジャイアンツというニックネームが現地で与えられ、これがジャイアンツを訳した巨人軍の名称が今日まで使われている。

36年に第二回の渡米を行った。

この年、日本職業野球連盟が結成され、東京巨人軍、大阪タイガース、名古屋軍(後の中日ドラゴンズ)、大東京軍(横浜大洋ホエールズ)、東京セネターズ(金鯱軍と合併して西鉄ライオンズ)、名古屋金鯱軍、阪急の7球団が参加した。37年には後楽園野球倶楽部イーグルスが加わり、8球団体制になった。この年、後楽園球場がオープンした。

36年には巨人軍と全大阪(翌年大阪タイガース)だけが対戦した変則のシーズンであったが、巨人軍が優勝した。7球団による試合が始まった37年の春は巨人、秋はタイガース、38年春はタイガース、秋は巨人軍が優勝した。

呉は7球団によるリーグ戦が始まった1年目の春のシーズンから、長い選手生活の第一歩を踏み出した。このシーズンにはセンターとして55試合に出場、打率2割8分9厘の成績で、早くも打撃ベストテンの5位につけた。

夏になると、後に「茂林寺の猛練習」として伝えられる巨人軍の練習が始まった。嘉農で農業実習と野球部の猛練習で鍛えられた彼は、間もなく練習に持ちこたえられるようになった。茂林寺とは、群馬県館林の茂林寺球場のことで、巨人軍はここで合宿をしていた。

後世に日本プロ野球史の名選手として名を残す人材が集まり、その中で呉は必死に練習した。

秋のシーズンが開幕した。藤本定義監督以下、沢村栄治、スタルヒン、三原修、白石敏男、中島治康などがチームの陣容だった。

呉は第一戦からセンター、一番でスタートしたが、好不調の波が激しく、19試合の出場にとどまった。しかし、55打席ながら打率3割2分7厘を挙げた。

翌38年の春には、甲子園で準優勝した熊本工業の川上哲治、吉原正喜のバッテリーが入団した。

呉はほぼ全試合の32試合に出場したが、打率は2割1分にとどまった。秋のシーズンは怪我のため、わずか5試合に出場しただけだった。

1シーズン制になった39年には、96試合中49試合に出場、打率は1割6分だった。それでも半レギュラーの地位を保てたのは、彼の外野手としての守備力があったからだ。巨人軍はこの年から5連覇をすることになる。

40年のシーズンも打撃不調で2割4分、104試合中91試合に出場した。この年、一度だけ投手として先発、7回を投げて失点9で敗戦投手になっている。川上も打撃ベストテン2位の打者でありながら、投手として6試合に登板、3勝を挙げた。兵役から復帰した沢村は7勝にとどまったが、新人の中尾輝三(戦後、^{ひろし}碩志に改名)が26勝を挙げて優勝に貢献した。中尾は同郷の伊勢市出身、京都商業も同じ沢村の2年後輩だった。

呉は41年のシーズンには全試合に出場、打率は2割2分にとどまった。彼は打撃改良を模索していた。

42年のシーズンでは、打撃改良の成果が出始めてトップバッターとしての地位を不動にした。後半に打率は落ちたが、2割8分6厘で初めての首位打者になった。プロ野球史上最低打率の首位打者として記録される。

こうして充実したシーズンを終えた。

白い布のスクリーンが風に揺れていた。

小学校の校庭で布のスクリーンを使った映画が上映されていた。子供たちが広場で野球をやっているシーンが映り、はしゃぐ声が聞こえた。「走れ、走れ」と誰かが叫んでいた。

よく見ると、橋仔頭公園の広場だった。おや、左の打席に立っているのは自分ではないか。みんな遊び仲間の子供たちだった。

攻守交代してレフトを自分が守っていた。大きなフライが飛んできた。背走して球を追いかけた。もう少しというところで、道路で爺さんが引いていたリヤカーにぶつかった。空のリヤカーの中にひっくり返ったが、運良くかすり傷ですみ、痛みは感じなかった。顔見知りの爺さんからは軽く叱られたが、爺さんに直接ぶつかったり、積まれた商品の果物を傷つけてでもしていたら、怒鳴られるくらいではすまなかつたらう。冷汗をかいた。

はっと目が覚めた。

呉昌征は巨人軍の合宿所の部屋でうたた寝をしていた。

1943年のシーズンは終盤に入っていた。巨人は優勝街道を走っていたが、呉自身は熾烈な首位打者争いの中にあり、打率3割の前後で好不調の波に苦しんでいた。この日は試合がなく、外出もせずに静かな合宿所で休養につとめていた。重い疲れを感じた。

暖かい陽が部屋にさしこんでいた。

《甲子園もプロも良いが、やはり野球は広場野球が最高だな。上級生も誰も威張らない、序列もない、補欠もない。なんとなく好きなポジションを選び、打順はいつも変わる。監督がいなから、サインもない。練習もしない、ユニフォームもなし。都合悪ければ欠席は自由で、強制もされない。球審は交代制で、塁審兼務。時々判定でもめるが、喧嘩も子供の世界のうち。頭数がそろわなければ、三角ベースでやった。門限が決められている家庭の子供たちは、陽が暮れるまで止められずに帰宅が遅れて、親に叱られることは常のこと。あれは本当に楽しい野球だったな。あんな子供の世界が本当にあったのか？》

呉はまた軽い眠りにおちた。

台風が来ていた。公園の楠と榕樹の巨木がしなるように揺れていた。子供にはいつも台風が怖かった。強風の音と横なぐりの雨に飛ばされそうになりながら、家に向かってひたすら走り続けた。小屋の板がはがれて舞っていた。やっとのことで家にたどりついた。

また、眠りから覚めた。開いた窓から風が吹き込んでいた。

「夢か」と気付いてほっとした。いや、夢ではあったが、見たものは子供時代に起きた事実ばかりだった。たまらなく故郷が懐かしかった。《帰りたい！》という気持ちが心を支配しそうだった。

呉は巨人に入団して3年目のシーズン後に、嘉農の近藤監督の招きで初めて台湾に帰った。巨人軍のユニフォームを着た彼は、母校の野球部員たちに打撃、外野守備、走塁、それにピッチングについて、目指すべき一段高い野球技術を教えた。その甲斐あって、それとも後輩部員たちが英雄から刺激を受けたせいも、嘉農は翌年全島中学野球選手権大会で優勝した。

あっという間に過ぎた一週間の滞在であったが、両親と兄弟姉妹にも会えた。恩師や旧友にも会えた。懐かしかったのホームグラウンドの公園にも行った。

彼は充実した気持ちで満たされていた。この時には日本に帰ることに迷いはなかった。23歳の年のことだった。

翌日から試合になると夢のことは忘れた。この年、巨人が優勝、呉は前年に続いて首位打者賞を取り、その上、初めての最優秀選手の栄冠を手にした。日本に来て6年目でプロ野球選手として頂点に登りつめたのである。

栄光の年ではあったが、呉の心境に少し変化が起き始めていた。

呉にとって最高のシーズンが終わった後、心境に微妙な変化が起きていた。

頂点に登って目標を失ったということではなかった。

次々とチームメイトが戦地に応召されていく中で、どこか取り残されるような感情を持たされていた。《これでいいのか?》、《野球をやっていていいのか?》と自問していた。戦局の不利が囁かれ、プロ野球が中止されるという噂もあった。

戦地から復帰した沢村は、肩を銃弾が貫通するという負傷から癒えたとは言え、投手生命を失っているように見えた。沢村は呉より一歳若く、呉が甲子園に出場した時に、京都商業のエースとして出場し、豪速球投手の呼び声が高かった。呉とは親しかった。捕手の吉原正喜も応召された。

まだ当時は、呉だけではなく、台湾籍の居住者は応招の対象になっていなかった。チームでは何となく居心地が悪く感じるがあった。そして、台湾に帰りたいという気持ちが強くなっていった。

シーズン後、呉は台湾に帰る決心を伝え、巨人軍に退団を申し出た。巨人軍から1500円の退職金が出ると、東京を引き払い、知人がいる大阪に移った。そこで台湾に帰る準備を進めた。

翌年、44年の正月に中華料理店を営む柳文明に挨拶するために訪ねた。彼は台湾二世で亡くなった父親の後を継いでいた。遠征試合で大阪に来た時には時々栄養補給に来ていた。

「台湾に帰るのか?さびしくなるな」と柳は言ったが、決心には反対しなかった。

「うん、オレはまだ28歳、台湾に帰って勉強をやり直して教員免状を取りたいと思っている。母校で野球部の監督をしたいという気持ちはあるが、それより野球以外に本業を持って普通の仕事をしたい」

「そうやな。どっちにしろ、いつか野球を止めて普通の生活に戻らなあかんわな。そっちの方が人生でははるかに長いからな」

「ほかにも感情の問題があってね。将来の仕事については考えて整理できるけど、感情は理屈じゃない。今、故郷に帰りたい気持ちで混乱しているのです」と、呉は普段とは違う急に丁寧な言葉を使った。

「ボクは二世として大阪で生まれて大阪しか知らないし、呉さんのように美しい故郷もない。景色から言えば、そりゃね、大阪は故郷なんてものやない。しかし、大阪を離れて住めば、大阪に故郷を感じるようになるかもしれん。そうや、明治の詩人が、室生犀星やったか、『故郷は遠きにありて思うもの』と詠んでいる」、とかつて文学青年だった柳が言った。

「うん、うん」

呉は自らを納得させるようにうなずいた。心の中で故郷への思い、将来不安、それに現下の戦争のことが入り混じって葛藤しているようだった。

後年、妻の和子に問われたことがある。

「なぜ巨人を辞めて大阪に行ったのですか？」

「仲間が次から次へ兵隊に引っ張られて出征していくから、オレも危ないと思って大阪に逃げたんだよ。

住所不定で雲隠れしようと思ったんだな」

しかし、台湾人に徴兵制が適用されたのは、翌年の9月であるから、呉が妻に言ったことは事実には合わない。おそらく彼は妻に一度は台湾に帰る決心をしたことを、冗談というより、知ってほしくなかったのだろう。

大阪で準備をしている間に、知人の紹介で^{こうじま}神島化学（今も健在）にしばらく勤務することを勧められた。ぶらぶらしていると、台湾に持ち帰る資金が減ることもあって、呉は臨時社員として働くことを受けた。宮原清社長は慶応大学野球部で4番を打ったことがある元野球選手で、呉のファンでもあった。初春に、宮原社長が親しい仲だった阪神球団代表に紹介し、野球を続けるように熱心に説得した。

呉は説得されると弱かった。野球にも断ち難い未練があった。こうして、呉は阪神タイガースに加わった。

何しろ、前年はライバルの巨人軍で最高殊勲選手になった球界ナンバーワンの外野手に対して、阪神も破格の条件を出していた。

シーズンが開幕すると、呉はトップバッター、センターとして実力を発揮した。この年、阪神は5連覇をしていた巨人を抜いて優勝した。呉は打率2割9分7厘で打撃ベストテンの4位、盗塁王を取った。

シーズンは戦局が悪化するに伴い、試合は土、日曜、祭日だけに行われ、わずか31試合だけのペナントレースだった。ついに、シーズン後に全球団が解散した。

45年8月の終戦まで、呉は阪神電鉄社員として処遇された。与えられた仕事は、甲子園球場の外野を芋畑に変えるために、現場監督として指揮を取ることであった。この時、すでに政府の戦時資材供出の命令で大銀傘は取り払われていた。

呉は嘉義農林で学んだことを思い出し、土壌改良から取り組んだ。《世の中にお役に立てる》と新鮮な気持ちが出た。お役に立てることを初めて実感した。時を忘れて働いた。

《巨人に居たら芋掘りはできなかったな》

終戦後の混乱の中で、プロ野球の復活は驚くほど早かった。終戦日から三ヶ月後には戦後初めてのプロ野球試合が行われた。

敵性スポーツであった野球が、一変して占領軍司令部（GHQ）の後押しを受けるようになった。読売新聞と戦前からの野球関係者がプロ野球の復活に尽力したことで、早くも11月23日には第9回となる東西対抗野球が実現した。

神宮球場には古ぼけたユニフォームを着た選手が集まった。東西対抗は今のオールスター・ゲームにつながる原点になった。呉は西軍の先発選手として、センター、トップバッターに選ばれた。

東西両軍の先発選手と投手は次のようだった。

東軍	西軍
監督 横沢三郎	監督 藤本定義
(1) 中堅手 古川	中堅手 呉
(2) 遊撃手 金山	遊撃手 上田
(3) 二塁手 千葉	二塁手 藤村
(4) 左翼手 加藤	三塁手 鶴岡
(5) 右翼手 大下	一塁手 野口
(6) 捕手 楠	捕手 土井垣
(7) 一塁手 飯島	右翼手 岡村
(8) 三塁手 三好	左翼手 下村
(9) 投手 藤本	投手 本堂
白木	笠松
	別所
	丸尾

野球の復活はプロ野球にとどまらなかった。

続いて翌年、東京六大学野球が春季リーグから復活、そして1927年に始まった都市対抗野球、夏の甲子園中等学校野球（翌年に学制改革で高校野球）も復活した》

こうして戦後の呉は、東西対抗野球で主力選手として再出発し、阪神電鉄社員から阪神球団の選手に復帰した。

一度は台湾に帰る決心をした呉は、終戦を挟んだ成り行きに流されるまま、その機会を失った。

《オレは、やはり野球選手として生きるしかない》と覚悟を決めていた。

世の中、決断力が強い男は機会を逃がすと大きなショックを受けるものである。しかし、彼は決断力が強いタイプではないが、過ぎたことにはくよくよしない大らかな性格が強味だった。

阪神球団は、呉のほかに、阪神電鉄社員として車両関係の仕事に携わっていた藤村、門前、本堂、土井垣らを阪神球団に呼び寄せて再建に着手した。

翌46年には大阪タイガース、巨人、阪急、中部日本（現在中日ドラゴンズ）、大平バシフィック（現在横浜ベイスターズ）、近畿グレートリング（現在福岡ダイエーホークス）、セネターズ（現在日本ハムファイターズ）、ゴールドスター（現在千葉ロッテマリンズ）の8球団によって、戦後初めてのペナントレースが始まった。

ペナントレースは、46年4月18日に開幕した。

この年、藤村富美男が監督になった。戦前からの選手を寄せ集められるだけ集めてチームを編成したが、投打のバランスを欠き、投手力がきわめて弱いチームになってしまった。そこで、藤村は窮余の策として、呉を投手に起用、投手として投げない試合では外野手として使うことを決めた。監督自身も投手と内野手の兼務だった。

呉はこれにはびっくりした。嘉農時代には投手の経験があったが、プロになってからは巨人で投手としてわずか一試合に登板しただけだった。打力、俊足、強肩を買われて外野手に転向し、それ以来一度も投手をやっていない。167センチの身長にハンディを感じていたので、投手には未練もやる気もなかった。それでも《プロとして生き抜くためには従うしかない。オレには生活がかかっているのだ》と割り切ることにした。

呉は相変わらず強運の持ち主だった。開幕間もない4月28日の阪急戦で早くも1勝を挙げた。6対1で完投した。それから2ヶ月足らずの6月21日、呉はとんでもないことをやってのけた。

西宮球場で行われた対セネターズ戦でノーヒットノーランの大記録を達成したのである。2対0の緊迫した試合が8回まで続き、9回に大量9点を取ったので、試合は11：0の完勝に終わった。

セネターズは8球団中5位で強いチームではなかったが、大下弘、飯島滋弥の強打者を擁していた。大下は台湾の高雄商業で名を知られた強打者だった。呉より6年後輩であったため、甲子園大会の予選では対決していなかった。

この年、呉は14勝6敗、防御率3.02の好成績を挙げたが、阪神は3位に終わった。彼は投手のほか外野手トップバッターとして101試合にフル出場し、打率2割9分だった。

47年のシーズンには阪神が圧倒的な強さで2位の中日に12.5ゲームの差をつけて優勝した。

この年、呉、金田、別当、藤村、土井垣、本堂と続く強力打線が、スポーツ新聞によってダイナマイト打線と名付けられた。

呉は打率2割6分7厘で12位、投手としては1勝0敗の成績だった。この年は南海の別所毅彦が30勝したのを筆頭に20勝以上の勝星を挙げた投手が6人、投高打低のシーズンだった。さらに、呉は40盗塁をしたが、惜しくも盗塁王のタイトルを逃がした。

48年のシーズンでは、南海が優勝、阪神は巨人に次いで3位に終わった。呉は打率2割7分7厘で打撃15位、投手として1試合に登板、勝敗がつかなかった。

この頃にはプロ野球の人气が高まり、山本一人（南海）、青田昇（巨人）、川上哲治（巨人）、千葉茂（巨人）、大下弘（セネターズ）、小鶴誠（太陽ロビンス）などの打者、別所毅彦（南海）、中尾碩志（巨人）、藤本英雄（巨人）、若林忠志（阪神）、スタルヒン（金星）などの投手のスター選手を輩出した。呉も阪神ダイナマイト打線のトップバッターとして、メンコやブロマイドで子供たちにも知られるスター選手に名をつらねた。

ここで戦後2年目のシーズンに戻る。この年、1947年は呉にとって生涯忘れられない年になった。

シーズンが終わると、呉は東京時代から親しくしていた石井和子と結婚した。呉は31歳、和子が19歳だった。

阪神に移籍した19年に、和子の伯父宅に東京に遠征してきた阪神の主力選手が遊びに来て、よくマージャンをやっていた。これといった趣味がない呉は、マージャンが趣味と言えるほど好きだった。この頃にはマージャンが好きな選手が多かったという。

彼のマージャンは、野球と同じで好守巧打の堅実な打ち方だったから、大きく負けることがなかった。いい小遣い稼ぎになっていた。黙々と打つ彼に、他の仲間が「呉さんの小遣いはオレが支給している」と嫌味を言っていた。

偶々伯父宅に遊びに来ていた和子と知り合った。その後も何度か顔を合わせるうちに、呉は和子に好意を持つようになったが、無骨な男は何も言えなかった。リーチをかけたかったが、じつと我慢していた。

間もなく、呉の胸の内を知るようになった仲間が、呉に後押ししてくれた。

他方、和子も彼に好意を持っていたが、そのうち彼が台湾人であることを知ると、決心に踏み切れなかった。周囲から心ない「彼は支那人」という雑音にも悩まされた。

やっと決心した和子と11月に結婚した。後年、彼女は「周囲押し婚です」とジョークを言っていた。

二人は甲子園球場の近くにある家の二階を借りて、新婚生活を始めた。

ある日、物資不足の中でラーメンなど中国料理の屋台を大阪で出している柳文明を訪ねた。話題が食糧難のことになった。ある日、

「GHQが外国人に優先配給してくれるのは有難いな」

「ボクらは台湾籍で、中華民國が戦勝国、台湾はその一部になってボクらも戦勝国民というわけや」

「うん、後ろめたい気がするよ。家内は阪神の同僚にも配っている。みんな苦労しているから」

「ボクも配給食糧も大根の葉っぱからふすま 麩（小麦をひいて粉にした時にできる皮の屑）まで、何でも中華風味付けにしてお客に安く出している。すぐ売れ切れるほどみんなに喜んでもらっているよ。土地はあるから、家を建てるまでは日本の人に奉仕するつもりや」

柳は米軍の空襲で店兼自宅を焼かれたが、当分は屋台で商売を続けていた。

戦前エースとして活躍していた若林忠志が新監督になった。ホーム球場として甲子園が使えるようになったことを、呉は特別の感慨を持った。戦前に甲子園でプレーしていたし、全国中等学校大会で春と夏を合わせて4度も黒土を踏んでいる。呉にとって甲子園は野球人生の原点だった。

3月1日からオープン戦が始まって間もなく、気がかりになっていることがあった。台湾で2月28日に暴動が起きたらしく、その詳しいことがよく分からないことだった。台湾側での情報管制が厳しいのか、新聞もラジオもほとんど情報を得られないようだった。柳も情勢が分からなくて苛々していた。

彼によると、台湾暴動の記事が朝日新聞に出たのは3月5日のことで、上海発の外電としてわずか6行の扱いで台北の平静化を伝えた。

また、3月末、シーズン開幕の直前に彼の屋台を訪ねた。ラーメンを食べながら彼の話を聞いた。柳が見せてくれた新聞の切抜きには恐ろしい記事が出ていた。

【上海八日発UP＝共同】左翼系連合日報の台北電によれば國府軍と武装した台湾省民の衝突がまだ省中南部の嘉義で激烈に展開されている。省中部と北部の支配権を奪った省民たちは國府から任命された官吏がほとんど逃げ去ったので、これにかわる人民委員会を組織中といわれる。また台湾省民学生は四、五千に上る負傷者救援のため医療部隊を組織したと報じられる。

「呉さん、驚くなよ。まだすごい記事があるんやで。嘉義ではえらいことが起きている。ボクも台南出身やけど、嘉義から近いから心配でしょうがないよ」

【南京三月二十六日発】台湾國府軍当局は台湾暴動の際、嘉義に人民政府を設立した70名以上の台湾省民を24日死刑に処した。陳儀長官の報復政策によって省民1万 명이殺害されるか行方不明になっている。

この記事を読み終えた呉の手が小刻みに震えた。

「リュウさん、えらいことになったな。オレの家族が政治運動に参加しているとは思わないが、学校の友達犠牲者に入っているかもしれん。一体、台湾では何がおきているんだ？」

「仲間の噂では共産主義分子が動いているらしいが、台北ならとにかくとしてもやで、嘉義では考えられんと思うわ。やっぱり台湾人の独立運動やろか」

もう話することもなく、呉は黙って味も感じなくなったラーメンを食べた。喉を通していただけだった。

その後は、国共内戦が一進一退していることを報じる記事が出るだけで、台湾暴動についてはまったく報道されることはなかった。

4月18日、戦後復活したプロ野球の第二年度シーズンが開幕した。呉は前年度に投手としてカムバック、14勝6敗の好成績を残していた。プロ野球の人気も高まりつつあり、チーム内で確固たる地位を固めた。《オレは当面野球で食っていける。オレにはこれしかない。台湾のことはオレには何もできない》と繰り返し自分に言い聞かせた。台湾のことは忘れるように努め、そのうち忘れた。

シーズンオフのある日、確か日曜日だったか、柳が呉の自宅を訪ねてきた。塚本と西宮は国電で15分ほどしかかからない。和子は二人の子供を連れて東京の実家に里帰りしていた。

二人の話は2.28事件と呼ばれるようになった台湾の暴動に及んだ。柳は客商売をしているせいで話題が豊富、それに中退を余儀なくされたが戦時中大学に通い、教養がある。関西在住の台湾人との人脈も広い。2.28事件についてもあちこちから情報を集めていた。呉は年長の彼から世間を学ぶことが多かった。

柳が世間話から話題を変えて2.28事件について語り始めた。

「暴動は収まったらしいが、国民党政府は猛烈な赤狩りを始めているらしい。共産主義者の摘発に名を借りた台湾人による独立運動に対する弾圧やろな」

「それはオレもわかる。大体、南部に共産主義者がいるわけないよ。台湾語を話せない大陸から潜入した共産主義者が南部に入れるわけない。独立運動に巻き込まれたのだ」

「そう、台湾人にとって独立運動は今に始まったことやない。独立運動の歴史は古い。原住民だけだった台湾を最初に支配したオランダ、オランダを駆逐したのは大陸を追われた明の軍人鄭成功、続いて清による支配、そして日本軍と続く。今度はやはり大陸から来た国民党軍や。外からの支配に対してはその度に台湾人は独立を求めたと思うよ」

「台湾人は一度も全土を統治したことはないの？」

「そういうことになるね。皮肉と言うか、台湾全土を開発して統治したのは日本の植民地政府が最初や」

ビールを空けて一息つくと、呉が会話を再開した。

「共産党は資産をすべて国有にして、農民も土地を持ってないというじゃないか。そうなの？」

「ソ連ではそうらしい。農民は一ヶ所の共同農場で働かされる。大陸もそうなるのかな」

「台湾はどうなるのだろう。オレは政治のことはよくわからんが、自分の農地も資産も持てない共産主義は嫌いだね」

「共産主義になると、ボクのラーメン屋も国立ということになるのかいな」

柳の冗談に二人は笑い合った。

「しかしなあ、呉さんもボクも台湾籍のままやけど、ぼつぼつ日本への帰化を考える時期かな。どう思う？」

「うん、オレも考えている。台湾では国語が日本語から北京語に変わったし、もう台湾には住めない。結論は出ているのだけど、何となく踏ん切りがつかないだけだよ」

呉は《当分台湾には帰れないな》、と思った。いつか母校の嘉義農林で教員になり、野球部の監督をやりたいと思っていたが、元プロ選手が監督になれるのか、そして教員免状を持たないでやれるのか、と疑問を持った。やはり、《自分は野球を続けるしかない》、と納得する他には選択がなかった。

シーズンが開幕して間もなく、五月に片山哲首相が率いる社会党政権に変わった。《日本はどうなるのだろうか？》 呉は不安になることがあったが、野球に集中することで不安を心の片隅に追いやった。心の不安を野球で克服することは、すでに呉の楽観的な性格に加えて処世術として身につけていた。

阪神が2位の中日に12.5ゲームの差をつけて優勝したのはこの年だった。呉は押しも押されぬタイガースのリードオフマンだった。

2.28事件 1

2.28事件と後に呼ばれる大騒乱はささいなことから始まった。いつの時代でもそうであるように、暴動はくすぶっていた煙に一つのきっかけが火をつけることから起きるものだ。これもその典型だった。

初代台湾行政長官兼警備司令官の陳儀に率いられた国府軍先発隊が台湾に上陸したのは1945年10月17日であった。10月25日に陳儀長官と最後の台湾総督安藤利吉陸軍大将の間で降服式が行われた。これで日本の台湾統治政府と軍隊は正式に降伏し、統治権が中華民国を代表する国民党に移譲された。統治権のみならず、公共機関、民間企業、私有財産のすべてが国民党に接收された。台湾に関する歴史書によると、その総額は当時の貨幣価値で約110億円に達し、国民党と国家(中華民国)が分離していなかったことから、これらすべての資産が国民党の所有に帰し、この体制は1980年代に国民党と国家が分離されるまで続いた。因みに、当時日本の一般会計予算歳出は約2000億円であった。

日本の陸軍士官学校を卒業した陳儀は、行政長官としては無能で、先発隊である総督府官僚と国府軍に対する統率力を欠き、食糧の横流しや賄賂の汚職がはびこっていた。住民の間では食糧不足と物価の高騰に苦しまされ、不満が高まっていた。

1947年2月27日、ヤミタバコを街頭で販売していた中年女性が、密売取締員と警官につかまった。その中の一人が女性を銃剣の柄で殴り倒すと、タバコと所持金を没収した。二人の子持ちの寡婦にとっては死活問題だったから、必死で土下座して許しを請うたが、取締員たちは無視して立ち去ろうとした。これを見た民衆が怒りを露わにして非難の声を挙げ始め、見る間に群衆の輪が官憲のグループを取り囲んだ。恐怖を感じた取締員の一人が、銃を発砲し、群衆の一人が射殺されてしまった。

たちまち噂が広まり、28日には暴動が台北を超えて全土に広がる事態になった。台北では行政府(旧日本の総督府、現在は總統府)の建物を取り囲む大群衆に対して国府軍兵士が機銃で無差別掃射をする暴挙に出た。暴動が拡大する中、少数の過激な抵抗勢力が外省人を狙いうちにする報復を繰り返した。台湾人にとって群衆にまぎれこんだ外省人は台湾語も日本語もわからないから、話しかければ見分けることは簡単だった。

2.28事件 2

約2千人の台湾人が虐殺されたと言われる暴動は3月8日、基隆に上陸した増援部隊によって徐々に鎮圧されていった。

1949年12月、蒋介石の国府軍は毛沢東の共産党軍との内戦に敗走し、それまで首府を置いていた重慶から逃れて台湾に脱出した。蒋介石に率いられた国府軍と追隨者を合わせ、約100万人が台湾に上陸した。当時、軍人と一般市民を合わせて50万人の日本人が引き揚げた後、台湾の人口は600万人であったから、その数は大変なものだった。基隆から台北に行進する彼らは、敗走で疲れ切った軍人と、わずかな家財道具を背にかついだり、鍋釜を手にした民間人の集団であり、沿道で見守る台湾人には統率が取れた占領軍の行進には見えなかった。

それから3ヶ月経った翌年の3月には蒋介石が中華民国臨時政府の総統になった。混乱が続く中、蔣総統は優れたリーダーの資質と強力なカリスマによって、強権下で治安を回復させた。翌年1948年には、行政長官として混乱を招いた陳儀が公開銃殺刑に処された。蔣総統は断固たる姿勢を台湾人に見せたのだろう。間もなく2.28事件に端を発する混乱は収められた。

同時に、その後40年間に及んだ世界最長の戒厳令の下で、共産主義者と独立運動グループに対する徹底した弾圧の始まりだった。80年代まで、暗殺に加えて、ある日運動家が突然行方不明になる、いわゆる白色テロが続いた。これによって共産主義者が根絶やしにされたのである。

台湾の治安は良くなり、その間、めざましい経済発展を遂げたが、反面、本省人（戦前からの居住者）と外省人（大陸から移住してきた国民党派）の溝が深まっていった。

日本台湾関係の始まり

ここで物語からひと休みして、日本が台湾史に初めて出てくる原点をたどってみることにしよう。

それは江戸時代第4代将軍徳川家綱の時代までさかのぼる。中国では清が全土を支配し始めた時代だった。

台湾では、1624年、安平（台南）に上陸したオランダ軍が二つの城を築き、南部を中心に台湾を支配していた。オランダ軍は高山族と呼ばれたポリネシアなど南方から移住してきた原住民や、すでに大陸から渡来していた中国人移民に対し、過酷な強制労働と重税を課していたため、彼らはオランダ軍に武装蜂起して抵抗した。しかし、戦力で圧倒するオランダ軍には抗しがたかった。

この頃、大陸では明王朝復活を掲げて立ち上がった鄭成功の軍が各地で清軍と戦っていたが、次第に南部に追われて台湾に逃れた。1661年、鄭は廈門から戦艦200隻に分乗した2万5千の兵を率いて澎湖島を占領、さらに安平に上陸し、オランダ軍と戦闘を始めた。

約2千人のオランダ軍はバタビア（現在のジャカルタ）からの救援を待ち、籠城で耐える作戦に出たが、救援の艦船は制海権を握る鄭軍によって沈められてしまった。鄭は水陸両面から二つの城を攻めたが、オランダ軍の強力な大砲による応戦のため城に近づけず、犠牲者が増え続けた。

そこで、鄭はオランダ軍への補給を断つと同時に、兵士たちに農地を開墾させることで食糧の自給を図る長期戦に切り替えた。9ヶ月に及ぶ兵糧攻めの結果、ついにオランダ軍が降伏した。

鄭はオランダ軍と戦う中、江戸幕府に救援を求めたが、鎖国政策を取る幕府はこれに応えなかった。しかし、鄭軍の中に日本刀で戦う「鉄人部隊」と呼ばれた日本人の傭兵がいたことが伝えられている。

鄭はその後台湾を拠点として、スペインが支配するルソン（フィリピン）を攻略しようとしたが、1662年5月、志半ばで病死した。これから以後、台湾は、1895年に日本による統治が始まるまで、長く清国の支配下に置かれた。清国は台湾統治には熱意を入れることがなく、そのため台湾の開発が遅れた。

鄭成功は別名^{こくせんや}国姓爺と呼ばれ、近松門左衛門が人形浄瑠璃「国姓爺合戦」を書き、1715年に大坂（当時の字）の竹本座で初演され、人気を博した。後に歌舞伎でも演じられるようになった。史実とは違う筋になっている部分もある。竹本座は現在、大阪の国立文楽劇場として継承され、「国姓爺合戦」は今も上演されている。

鄭成功は中国人を父に、日本人を母に持ち、平戸で生まれた。「鉄人部隊」と日本人の母は、日本と台湾が初めて接点を持った史実であろうか。

台湾の住民、台湾人が外部からの侵入者による支配から解放されて自ら全島を統治したい、という宿願には400年近くもの歴史がある。それは政治的目標である以上に、住人が自分の国を持ちたい、という自然な感情に根ざしていると言えよう。日本ではどこまで知られているかわから

ない。

戦後4年目のシーズンが始まった。この新婚の年、呉は打撃不振に悩まされ、出だしから苦悩のシーズンだった。

長いシーズン中には何度かスランプはあるものだが、そう長くは続かない。しかし、この年は集中力を欠くことに悩まされた。打席に入っても、どこか勘が鈍く、身体が瞬時に反応しない。

ずっと入ってくる打ちごろの初球にバットが出ない。その後ツーストライクを取られてからきわどいコースの球で打ち取られることが多くなっていた。力士が仕切りの間に気力を高めていくように、ウエイティング・サークルで打席を待つ間、相手投手に合わせて素振りの回数を増やしてもみた。少しは改善を感じたが、全体としてはあまり変わらなかった。スランプを意識すると、ますます深みにはまっていくようだった。

新聞やスポーツ雑誌には、「呉はもう歳だ」、「体力が衰えた」と書かれた。《おい、待ってくれよ。オレはまだ32歳だ。冗談じゃない》と反発した。どこかしっくりこない、こんな状態が続いた。そのうち新人の後藤次男がトップを打つようになり、呉は先発を外されるようになった。プロになってから初めて経験する苦渋だった。ベンチを温めることが度々あると、さらに集中力を出すことが難しかった。先発、ベンチの繰り返しさらに打率を下げた。

打席に入ると、親戚の法事に出た時に覚えた「念彼観音力」を呪文のように唱えてみるようになった。

結局、この年、打率2割2分3厘に終わった。これまで悪くても6分台だったのに、呉には大きな失望だった。

それでも打撃では他に脅かされても、外野守備では余人が及ばなかった。

甲子園球場で行われた対巨人戦で、温厚な呉が珍しく怒ったことがあった。

巨人の千葉が打った右中間への早いライナーは、外野フェンスまで抜ける二塁打だった。彼はそう思って二塁ベースを踏んだ。ところが、右打ちの名人千葉に対して、予め少し右にシフトしていた呉は、俊足を飛ばして回転レシーブで捕球した。このファインプレーでヒット一本を失った千葉は、思わず呉に向かって「馬鹿野郎！」と怒鳴った。すると、呉は千葉のそばまで走ってきて、「馬鹿野郎とはなんだ。オレはおまえの先輩だぞ。この馬鹿野郎」と怒鳴り返した。打撃不振のため苛々が鬱積していたのだった。呉は戦前巨人の主力選手であった時に、千葉が新人として入団してきたのだった。

千葉は後年こんなエピソードをスポーツ誌に書いている。

呉が阪神で不振にあえいでいるシーズン中、東京では騒乱が相次いでいた。

この年、1949年7月6日に、国鉄の下山定則初代総裁が常磐線北千住駅の近くで轢断死体となって発見された。前日、普段通りに自宅を迎えの公用車で出発し、三越に立ち寄った後失踪していた。当時、GHQと政府の方針で国鉄職員10万人の人員整理が行われようとしている最中の事件だった。

下山事件から一か月余りの間に、三鷹事件と松川事件が起きた。三鷹事件は、7月15日、三鷹駅構内で無人列車が暴走し、駅の利用者6人が即死したほか、列車が線路脇の商店街に突っ込んで20人もの負傷者が出るという大惨事だった。次いで8月17日には、福島県松川町で列車が転覆し、蒸気機関車の乗員3人が死亡した。レールが外され、多くの止め釘が抜かれていたことが原因だった。

国鉄の共産党系労働組合の首謀ともGHQによる陰謀とも言われたが、真相は分らず、この三つの事件は国鉄の三大ミステリーと呼ばれた。

この事件後、共産党とその影響下にあった労働組合運動は、世論の強い批判を招き、抑圧される結果を招いた。

シーズンが終わると、さらにプロ野球を揺さぶる事件が起き、呉が騒動に巻き込まれる事態になった。呉には社会の騒乱以上に、直接身にふりかかる事件が起きた。

リーグが二つに分裂 1

1950年は、日本プロ野球を揺るがす大事件の年になった。今日ある2リーグ制が始まった年である。

呉が不振に悩まされていた前年のシーズンが、終盤にさしかかる9月に毎日新聞から新球団の加盟が申請された。読売新聞の正力松太郎が1リーグ10球団の構想を提案し、毎日新聞に働きかけたのだった。

1リーグ10球団の構想は、54年後の2004年に読売新聞主筆で巨人のオーナーであった渡辺恒雄が再び実現しようとした。近鉄とオリックスの合併に端を発した騒動は、1リーグか2リーグかで大きく世間を騒がせたが、合併に反対する近鉄の選手を中心にする新球団の楽天イーグルスの設立によって2リーグ制が維持されることで騒ぎは収まった。1リーグ制は読売の執念であったのだろうか。

さて、事態は思わぬ方向になった。加盟申請をしたのは毎日にとどまらず、近鉄、西鉄、大洋漁業が球団設立を相次いで表明したために、正力の10球団構想が立ちいかなくなる事態になってしまった。さらに、当初毎日の加盟に消極的賛成の立場を取っていた阪神が、代表者会議で正力のお膝元の巨人をはじめ、中日、太陽が構想に反対するグループに加わった。

そこで、正力は、それでもあきらめず、12球団による2リーグを結成、将来は両リーグ8球団ずつに拡大する新構想を提案した。プロ野球拡大に執念を持つ正力の説得が功を奏して代表者の多数決により2リーグ制が実現した。戦前からプロ野球振興に貢献し、今日ある形を整えた正力が「日本プロ野球の父」と呼ばれる所以である。

執念と言えば、毎日新聞が持ってきた野球に対する執念は古い。1924年には大阪毎日新聞が選抜中等学校野球大会（春の甲子園）、1927年には全国都市対抗野球大会を主催、今日に及んでいる。毎日のプロ野球球団設立もその延長だった。

リーグが二つに分裂 2

紆余曲折の後、日本野球連盟が分裂し、毎日の加盟に反対した球団を中心にセントラル野球連盟と、賛成派の球団が加盟した太平洋野球連盟が設立された。今日のセントラル・リーグとパシフィック・リーグの始まりだった。翌年から両連盟に分かれた各7球団によってペナントレースが行われるようになった。

<セントラル野球連盟>

読売ジャイアンツ

大阪タイガース

名古屋ドラゴンズ

松竹ロビンス

大洋ホエールズ

広島カープ

西日本パイレーツ

<太平洋野球連盟>

南海ホークス

阪急ブレーブス

毎日オリオンズ

東急フライヤーズ

大映スターズ

近鉄パールス

西鉄クリッパース

騒ぎはこれで納まらなかった。

毎日は、それまで会社チームの強豪であった別府の星野組を中心に会社チームから選手を集めていたが、一転して阪神から選手引き抜きを始めた。新聞は、「毎日は、加盟に賛成から反対に転じた阪神に対して、その復讐に出た」などと興味本位に書いたが、事情はそんな単純なものではなかっただろう。阪神には言い分があったはずだ。

毎日に引き抜かれた阪神の選手グループに、呉も加わった。レギュラーから半分外されていた呉のほかに、

若林忠志、別当薫、土井垣武、本堂保次、大館勲の主力選手がごっそり毎日に移籍したのだから、阪神の被害は甚大だった。

これを機にして、セ・パ両リーグの間で引き抜きの泥試合に拡大し、50人を超える移籍選手が出るようになった。事態の收拾にGHQから要望書が出されるほどだった。

GHQの要望、実質命令によって、引き抜きの中止、コミッショナーの設置など、これ以後のプロ野球の制度固めに働いた。「雨降って地固まる」ために犠牲を払ったのである。

世の中ではプロ野球騒動にとどまらなかった。

6月には朝鮮戦争が始まった。連日朝鮮戦争について新聞が一面で報道した。8月には自衛隊の前身である警察予備隊が創設された。呉は《もう戦争はこりごりだ》と心底思いながら、《一体、日本はどうなるのか。戦争に巻き込まれるのか》という不安にさいなまれながら、何とかカンノンリキの呪文を唱えて集中を試みた。《オレは野球選手だ。一介の野球選手だ》と自らに言いきかせた。

台湾では、大陸で敗色が濃くなった国民党軍の上陸に備えて戒厳令が発せられた。呉が知ることとはなかった。

プロ野球全体を揺るがす事件のほとぼりが冷めた頃、中華料理店の柳から電話があった。柳が会いたいと言ってきたのだった。

呉が毎日オリオンズへの移籍グループとして西宮から東京へ引っ越しする直前に、柳を訪ねた。この頃、柳は兵庫県に近い塚本に古い二階建ての家を買って、一階を店舗に二階を住まいにしていた。24時間労働と称して働き者の彼は着実に基盤を築いているようだった。料理の種類も増えていた。妻が料理と店員の掛け持ちで忙しく働くほかに、若い台湾人の店員はパートで雇っているという。

店には数人の客がいたが、テレビもない時代で、呉の顔は知られていないのが幸いだった。それに小柄な呉は野球選手には見えなかつただろう。呉と知られたらまずいことになったかもしれない。深夜になって客が帰ると、呉と柳はカウンター越しに話した。熱烈なタイガースファンである彼は、タイガースがこれからどうなるのかと心配する以上に、呉の身を案じていた。

「呉さん、一体何が起きたんですか？毎日のやり方はむちゃくちゃや」

「うん、オレもすっきりしない気持ちがあるよ。何しろ阪神には6年も世話になったからね。しかしなあ、移籍組はみんなマージャン仲間で、オレには代えがたい友達ばかりだから、彼らと一緒にいきたいと思ったんだ。年俵が上がることはどうでもよかった。ただ、東京出身の家内は喜んでるよ」

「太平洋リーグという新リーグはうまくいくのかな。いっぺんに球団がふえたから、客の取り合いにならんやろか」

「そうだね。ここの通りに新しくラーメン屋が急に開店したようなものか」と呉は笑えないジョークを言った。続けて、

「藤さん（藤村富美男）には叱られたよ。彼の家とは目と鼻の先で、家族ごと親しい付き合いをしていたからね。オレは何も言えなかつた。藤さんは、『オレはタイガースの藤村や。引き抜きなんかに乗れるか』と頑として引き抜きの誘いを拒否したそうだ」

「彼は武士みたいなものやろな。そういう風貌をしとる。身体もでかいね」

「そう、横幅は恐ろしく頑丈な体つきをしているよ。

しかしね、背は見かけほど高くないんだ。オレは167センチだけど、5センチくらい高いだけだろう。あれで物干し竿と言われる長いバットを振り回すから、大きく見えるんだよ。今ではあまり知られていないけど、彼は春夏の甲子園大会に6回も出ている」

「呉さんも何回も出たやろ」

「藤さんには及ばないよ。4回出たが、ベスト8が最高だった。彼は凄いよ。呉港中学4年の時に、エースとして川上の熊本工業を決勝で完封して優勝しているからね」

「そこまでは知らなかつたな」

寡黙な呉にしては、藤村について珍しく長い話をした。

藤村富美男は「甲子園の申し子」と言われるほど甲子園で活躍し、今風に言えばドラフトのナンバーワン候補だった。呉と同じ年に生まれたが、プロ野球には1年早く、阪神に入団した。

入団後、投手として起用されたが、ぱっとしなかった。3年後、1939年から4年間は兵役に取られていた。阪神に復帰した翌年には二塁手に転向したものの、打率が2割。戦前最後のシーズンには初めて3割1分を打ち、打撃ベストテンの5位になった。投手としても2試合に登板した。

戦後初年度の1946年に、ようやく才能の芽が開く活躍を始めた。打率3割2分、投手としても13勝2敗の成績を挙げたが、ホームランはまだ5本を打ったに過ぎなかった。「甲子園の申し子」がプロ野球でもスター選手になった年だった。

それから2年は打率が3割にとどかなかつたが、48年にはホームラン13本を打った。ホームラン王になる兆しが見え始めていた。

リーグ分裂の前の年、呉が不振に悩んでいた年、藤村は突然打者として才能を出し始めた。この年、彼は最優秀選手、本塁打王、打点王の栄に輝いた。打率は2位で惜しくも三冠王を逸した。

その後も長く4番打者として活躍、引退後もコーチ、監督になり、「ミスタータイガース」と呼ばれた。

生涯打率3割、ホームラン224本、投手として34勝の成績を残した。

1974年、野球殿堂入りした。

「柳さん、ぼつぼつ失礼するよ」

「阪神ファンとしては残念やけど、毎日ではカムバックしてもらいたいね」

「うん。まあ、近鉄や阪急との試合があるから、大阪に来たらまた会いにくるよ」

二人はこれで別れた。

妻子とともに東京に引っ越しするため、大阪から列車に乗った呉は気持ちが重かった。《プロ野球はどうなるのか？日本はどうなるのか？》と考えずにはおられなかった。かつて台湾から東京に行く時も心配したが、今はその時以上の緊張を強いられていた。しかし、彼は家族の前では表情を出さないように努めた。

《オレは野球選手だ。今は野球選手としてカムバックすることが、家族を守ることになるのだ》と、自らに言い聞かせた。

列車の旅は長かった。

1950年は、セ・パ両リーグに分かれた最初の記念すべきシーズンであると同時に、呉にとっては再起を賭けた年だった。

高知キャンプから身体を鍛え、バッティング技術をいろいろ試していた。そして、この高地キャンプでは思いもよらなかった選手と再会した。その人は今久留主淳だった。

今久留主は、呉の嘉義農林野球部のチームメイトであり、二人は何度もともに甲子園に出場したのだった。二人は抱き合って13年振りの再会を喜んだ。今久留主は九州のノンプロの強豪、都市対抗野球で優勝した星野組の主力選手だった。32歳で毎日に入団、プロ野球選手としては遅い出発だった。内野手として好守巧打で鳴らし、野球通のファンに人気があった。

シーズンが始まると、呉は一番か、時に二番を打ち、打撃は好調だった。浮き沈みを彼らしく調整していた。新球団毎日オリオンズは、阪神から引き抜いた有力選手が実力を発揮し、シーズンを通してほとんど首位を走って優勝した。

呉はかつての調子を取り戻し、打率3割2分で見事カムバックを果たした。ホームランも7本打った。まだまだ実力を持っていたが、再起の機会を与えられたことに奮起し、その上彼の持ち前の強運もあっただろう。世間で言うに、幸運も実力のうちであるかもしれないが、いくら実力があっても機会を与えられなければ発揮しようがない。呉は毎日でも、巨人、阪神時代に続いて優勝経験に恵まれた。ことの成行きとは言え、当時、3球団を渡り歩き、しかも3球団で優勝経験を持った選手は稀有だった。

そして、第一回の日本シリーズに出場した。

1950年11月22日、第一戦がセ・リーグの覇者松竹ロビンスを相手に、神宮球場で幕を明けた。毎日の監督は湯浅禎夫、松竹は小西得郎だった。小西は後にラジオの野球解説者として、独特の話術で一世を風靡したその人である。

この試合、毎日が3：2で勝った。

続く第二戦は、後樂園球場に舞台が移され、3万5千人の観衆で埋まった。

呉は初回裏、二番打者としていきなりホームランを放った。これが日本シリーズに記録される第一号ホームランになった。華麗な守備とは対照的に、地味な打撃の彼が華々しい一打で観衆を沸かせた。

その後、主力のベテラン選手に衰えが見え始めた。呉は翌年も3割を打ったが、徐々に打率が下がり始め、6年目の1955年のシーズンに3割2分9厘に上げたのが最後の3割打者だった。

もうカンノンリキも強運も通じない体力の衰えには勝てなかった。彼は1957年、21年目のシーズン、41歳の年に現役を引退した。この年には外野手、四番打者の選手兼監督をしていた別当も現役を引退し、監督に専念することになった。土井垣も引退した。他方、完成した打者と言われた榎本喜八、早大から入った荒川博が活躍する世代に移った。

呉は別当監督から請われて助監督に就任した。

呉が毎日時代に、初めて長男昌博に伴われて妻が夫のプレーする試合を観戦した。家ではまったくと言っていいほど野球のことを話さなかったし、和子も野球には関心を持っていなかった。和子の野球知識は恐ろしいもので、付き添いの長男を驚かせた。後楽園の外野後方にある得点掲示板を見た和子が、「1万200対1万1点でどっちが勝っているの？」と訊いた。彼女は5回までの両軍得点を頭から、10200対10001点と読んだのだった。昌博にとって、和子に野球のルールを教えることは至難のことだった。中でも、「ファウルを何本打っても、なぜツーストライクのままなの？」という質問には理解してもらうのに窮した。また、「なぜ相手チームだけが代わりのピッチャーを使えるの？」の質問にも困らされた。代打や代走を説明するのにはお手上げだった。

1953年にNHKがプロ野球のテレビ中継を始めた。白黒テレビ放映から、プロ野球のカラーテレビ中継が始まったのは7年後の1960年だった。間もなく、贅沢には関心がない呉にしては、珍しくGE製のカラーテレビを買った。和子とともにプロ野球をテレビで観ることが楽しみになった。ようやく和子にも野球のルールが分かるようになってきた。

その後、大映スターズと合併した大毎オリオンズは1960年にパ・リーグで優勝した。しかし、大毎を継承した千葉ロッテマリーンズが再び日本シリーズの勝者になるのは、2005年、48年後のことだった。

完全にプロ野球界から身を退いた呉は、一休みすると念願だった会社員の仕事を考え始めた。野球を離れて普通の仕事に就いて普通の人になりたかった。《世間からオレの名前が忘れられてもいい》と思っていた。

しかし、あれから10年、会社というものは自分の名前か、金を求めてくるだけで、自分がやれる仕事に期待しているわけではなかった。会社のお客の接待でマー جانをした時には、《オレはお座敷の聲がかかった芸者だな》と内心思った。また、《棚に飾っておく置物みたいな存在か》、と感じることもあった。50歳を超えた今では仕事の機会もなかった。

珍しく大阪の在住台湾人から相談を受けて大阪に出張した時、柳の店を訪ねた。店には数人の客がいたが、誰も元プロ野球の選手、呉に気付かなかった。ゆっくり食事を取り終わり、客が帰ってから二人になると、食器の片付けをしながらいつもの通り、柳が語りかけた。

「呉さん、仕事ではいろいろ苦勞してきたな。世間で言えば、ぼつぼつ定年退職の歳に近付いている。世間のことも分ったのだから、もう仕事にあくせくするのを止めてもええやないか」

「うん、家内や子供たちからもそう言われている。ゆったりと生活を楽しんでほしい、とな」

「ところで、話が変わるけどな、呉さんはまだ国籍は台湾のままか？」

「うん、そのままだ。いつも考えてきたが、何と言うか、オレは足は速いが、決心にはぐずぐずして遅いんだよ。差し迫らないと決められない。息子が大学を卒業して就職する前には帰化するつもりだった。呉姓じゃ就職に不利になるかもしれんと思っていた。それもぐずぐずしてできなかった」

「しかし、帰化するつもりやな？」

「うん、決めている」

「ボクも息子が台湾から帰ってきたら、一緒に帰化することにしている。ボクは在日台湾人の二世やから、親父の国籍のままできたが、これからは新しい日本の時代に合わせて、息子も日本人になるのが自然やと思う。息子の考えに従う気持ちかな」

「息子さんは台湾にいるの？」

「大学に行くことを勧めたけど、高校を卒業すると、料理人の修行をすと言い張って台北に行った。これからはレストランも特徴を持たなあかんと言って、台湾料理の店で見習いをしているよ。帰ってきたら店を継いでくれる」

「彼は台湾語をしゃべれるの？」

「いや、日本語しかしゃべれない。目標が大きくてね、料理以外に北京語と台湾語の勉強もしているそうや」

「それはいいね。柳さんもオレも日本語しか話せないもんな。新しい世代は違うな」

「大阪には台湾人が多いから、商売にもプラスになると考えているかもしれん。ところで、あなたの息子さんはどうしているの？野球選手にならないの？」

「全然。運動神経はまあまあだが、細身で野球選手には向かない。小学生の頃にはキャッチボールの相手をしたが、その後は野球の話は一切しなかった。素質が多少あったとしても、親父の苦勞を見ているから野球選手にはならなかったと思うよ。プロ野球の世界はいくら親が有名選手でも、世襲が利かない実力の世界だからね。今は経理が専門のサラリーマンをしている」

「それは安心やね。ボクの息子も自由に、長く楽しめると言っ、柔道をやっていた。あまりのめり込まない性格やから、高校でやっと初段を取った程度。多分、台北でもやっているかもしれん」

柳と別れてからも、呉は帰化のことについて考えていた。最近、癖になった眉間に皺をつくりながら黙々と歩いた。

《もう決心しなくてはならんな。帰化するのに何にも障害がないのに、オレは本当にぐずだな。人生というものは、野球のようには行かないものだ。息子が結婚するまでには家長として帰化するか》

呉が現役から引退した1957年、助監督も退任して毎日オリオンズのスカウトになった。スカウト業は慣れない仕事であったが、彼生来の生真面目さで各地の高校野球を観戦して目立たない選手の中に人材を探し求めた。当時、球団は設立から7年、赤字経営が続いていた。他のパ・リーグ球団もセ・リーグの人気に押されて台所の事情は似たりよったりだった。新人選手に大金を払えない制約の中では、地方の高校生に重点を置いた。こうして全国を回っているうちにシーズンオフの秋が来た。

10月の中頃、台湾野球協会の招きで二度目の台湾訪問をした。巨人時代の訪問から20年振りのことだった。真っ先に弟と親戚数人に案内されて台南にある両親の墓に参った。この20年間一度も帰れず、両親に会えなかったことが無念だった。巨人を退団して台湾に帰らなかったことに後悔の気持ちがあったが、今さら悔いても仕方がない。こみあげる涙を抑えることができなかった。

それから連日のように講演と会合の旅が始まった。台中、嘉義、台南、高雄の野球協会支部で講演し、夜は支部役員と懇親会に出席した。講演会では彼が話す日本語を同世代の友達が北京語で話す通訳を務めた。彼もほかの友達も、戦後に国語が北京語に変わって中学から北京語を勉強したのである。そのために、彼は台湾語、北京語、日本語、それに英語も少し話すことができる。

呉は幼少から日本語で教育を受け、家族とは台湾語で話したが、それも遠い昔のことだった。もう片言しか台湾語を話せなかった。彼はどの講演会でも自身の選手生活を話しながら、日本のプロ野球事情について詳しく語った。出席者は彼が生きてきた戦前戦後の激動の時代、日本のみならず、日本のプロ野球の激動の時代に大きな関心を寄せた。

懇親会ではどこでも「呉さん、これからどうするのですか？」という質問が出た。「それが私の問題なのです」と冗談を言って笑わせたが、彼には冗談ではなく、直面している問題だった。

嘉農野球部仲間や同級生との会合にも招かれた。みんな40歳代を超え、教員、公務員、会社員として油が乗った働き盛りだった。彼は《オレはこれから人生をやり直さなければならない》と何度思ったか。

台南の市中にある弟宅に帰ると行事から解放されて休憩の時間を持てた。《あそこにも行ってみたい》と思っていた橋仔頭に出かけた。かつての自宅はもうなかったが、公園にそのまま残っている楠の大木、桜の木に似た羊蹄甲、神社の参道、小学校、どれもが当時のたたずまいが変わっていなかった。台糖の敷地には立派な博物館ができていた。製造工程の設備がモデルとして展示されていた。

《オレはここで育ち、ここしか知らなかった。ここはオレの世界だったな》と独り言をつぶやいた。かくれんぼ、木登り、野球をした小学校時代の仲間たちが無性に懐かしかった。母校の嘉農にも、南部選手権が行われた球場にも行った。

旧友たちと阿里山に高山鉄道で登った。

前日から子供が遠足に出かけるようにわくわくしていた。嘉義農林の学生だった時、校外実習の行事で登って以来のことだった。

あの時には、森林局の官舎に泊まって、植林や間伐の実習をした。あちこちにある樹齢3千年を超えるタイワンヒノキに驚き、その中に神木と呼ばれる巨木があった。真っ暗な夜の空、山影の上に見える月が美しかった。また、ある朝、来光を見るために阿里山駅から乗り継ぐ列車で頂上駅まで出かけた。連なる山並みの中に三角形の頂きを出している新高山（台湾最高峰3952メートル、現在は玉山）の周囲が陽光で赤く染まると、太陽の一部が顔を出し、あっという間に上った。思わず手を合わせて拝んだことを憶えている。

今回、登山鉄道は全車両が旅客用、ジーゼル機関車で後ろから押されていた。当時は蒸気機関車が押す材木運搬の貨物車専用であったが、現在も蒸気機関車一台が保存され、週末に運転されている。今日では世界的に知られる高山鉄道は予約の切符を入手できないほど、人気が高い観光列車になっている。

列車は、山の斜面をぬうようにして登るループ式によって高度を上げていき、最後にスイッチバックを二度繰り返すと阿里山駅に着いた。3時間半かかった。今回も呉は森林局の官舎に一泊し、翌日まだ暗い早朝に乗り継ぎの列車で山頂駅に登ると、来光を待った。

人、人、人の群れの中でしばらく待つと、山並みが明るくなってきた。間もなく顔を見せた太陽に思わず手を合わせた。目頭が熱くなったことも校外実習の時と変わらなかった。

もう11月下旬になっていた。台南にいと日本の季節を忘れる。妻の和子からの電話ではもう東京は寒いという。弟や旧友に見送られて台南駅から特急列車に乗った。

呉にとって新たな人生の始まりであった。

台湾から帰って間もなく、関西に出張したついでに柳の中華料理店を訪ねた。彼は阪神電鉄の甲子園駅近くに店を買っていた。二階建ての家は新築ではないが、一階が店舗、二階が住居になっていた。甲子園球場からも近い。親から相続した家を売った資金で買ったという。彼らしい堅実さで着々と事業を発展させているようだった。

台南から日本に移住した一世の父親は、神戸の中華街の料理店で丁稚修業から初めてシェフの経験を積み、支店を任せられるまでになったが、自分の店を持つことはなかった。息子の代で自分の城を持ったのだった。

ランチ時間の終わった2時前で、呉は先ず食事を済ませた。最後の客が帰ると、店は休憩になった。

柳は一人の雇い人とともに食器洗いを終わると、挨拶もそこそこに金門島砲撃事件のことを尋ねた。柳は料理店店主というより、教養人の顔に見えた。日本でも大きく報道されたという。

「えらいこっちゃな。これから台湾はどうなるんやろ」

「それがね、外人の自分から見るとね、南部の人間は大人たいじんなところがあるし、呑気な気質みたいだから、大騒ぎしたのは最初だけだったようで、日本に帰る頃にはあまり気にしていなかったよ。アメリカの第七艦隊が海峡に入ってからには砲撃も下火になっていた」

「解放軍は島への上陸をあきらめた？」

「友達は解放軍には制空権も制海権もないから上陸は無理だと言っていた。また、解放軍は装備も良くないし、とても戦闘を続けられない。中には実戦演習だとジョークを言っていた友達もいたね。国府軍の士気はものすごく高いそうだ」

「苦難をなめてきた南部の人たちには、またか、という思いか。何事が起きても平然と日常生活を送るような強さがあるのかな」

「確かに、彼らには、何と言うか、対岸の火事を眺めているようなところがあると感じたよ」

「それなら、ボくら、在日台湾人にはまさに対岸の火事やね。そのうち火がおさまるやろと高見の見物をしているみたいや。何かあると、他人事でいられることに後ろめたさを感じることもあるな。いや、ボくらだけやない。日本全体がそうなんや。仕方がない。国府軍の台湾上陸も、朝鮮戦争も、今度の金門島も、日本にとっては対岸の火事やった。もし中共が台湾を占領したら、台湾と沖縄の公海が中共に実効支配されて中共の内海になってしまう。日本にとっても悪夢やな」

「日本の人は、戦争はもうこりごりと思っているから、この前の戦争の後遺症みたいなものを持っている。日本は平和な国だわね。ここで生かしてもらえないと思っている」

金門島砲撃事件は、呉が二回目の台湾帰国をする二カ月前、1958年8月に起きた。台湾全土を揺るがす大事件だった。それは呉が台湾に滞在中の10月まで続いた。

事の発端は、突然、中国人民解放軍がアモイ（廈門）から台湾領の金門島に向けて大砲撃を始めたのだ。大陸の沿岸都市アモイから小豆島ほどの大きさの金門島まではわずか数キロの至近距離にあり、国府軍の金門島基地は中共にとっては喉に刺さった棘みたいなものだった。中共が台湾解放の前線基地として金門島の占拠に出ることを予測し、国府軍は防衛戦略に入れて島を要塞化していた。ここに8月23日の初日、人民解放軍は5万発の砲弾を打ち込んだ。解放軍上陸の前哨戦だった。

国府軍が頑強に抗戦して島を死守する間に、アメリカの第七艦隊が台湾海峡に出動したことから、結局、解放軍の島への上陸は阻止された。国府軍に約400名の戦死者を出したこの事件はひとまず収まった。しかし、その後20年間もアモイから島への砲撃は年中行事のように続き、1979年に米中間で国交樹立が成立するまで続いた。

中共にとっては、皮肉にも、砲撃事件は台湾のすべての人々が一つになって団結を強めることになった。氏素性、政治観が何であれ、反共は共有する強固な基盤であった。

1995年、42歳の若さで亡くなった台湾の人気歌手テレサ・テンは、金門島の前線に配置された国府軍兵士たちを励ますために、「君在前哨」（あなたは前線に）を熱唱した。彼女は国府軍とともに台湾に移住してきた外省人の子女だった。

1962年のシーズンが終わった直後、呉は久しぶりにマージャン卓を囲んだ。面子は阪神からの移籍組で、この時には戦前の阪神時代からマージャン仲間だった若林忠志、本堂保次などが集まった。みんな現役を引退していた。すでに、呉がスカウトも辞めて野球界から引退してから4年が経っていた。

手を動かしながら、懐古談が花を咲かせた。そのうち王貞治のことが話題になった。王が巨人に入団して4年目のこの年、初めて一本足打法に変えて才能を開花させ、注目のスター選手に躍り出た。38本のホームランを打って初めての本塁打王になった。

「今年、あの一本足打法でよく打てたね。すごいよ」

「すごいのは、コーチの荒川君（博）の方じゃないか」

「荒川をコーチしたのは呉さんだからな。王は呉さんの孫弟子ってことになるな」

ビールが利いてきて、座が賑わう中で、酒を飲めない呉は黙って聞いていたが、この持ち上げには照れくさかった。左手を左右に振って打ち消しながら、呉が言った。

「いやいや、それは事実誤認だ。オレは何もやっていない。オレは口下手でコーチには向いていないと思っている。荒川は打撃技術を理論で磨くタイプでね。彼は理論を考えて、すぐに身体で表現できるんだな。163センチの身長で、レフト別当、センターはオレ、荒川はライトの正位置を取ったのだからすごい。荒川はもともと打者としての素質があったのさ。彼からもアドバイスを求められたが、オレはこうして球に向かうんだ、とフォームを見せるだけで、口ではうまく言えなかった。いつもはがゆい思いをしたよ」

「今考えると、川上監督がコーチ経験もなく、オリオンズを引退したばかりの荒川を、よくも天下のジャイアンツにコーチとして招いたものだね。川上さんも偉いよ」

「うん、結局、それが王を育てることになり、長嶋の一枚看板だった巨人が、あれは3年後からだったか、V9の黄金時代になったんだな」

「川上さんは荒川が王を小学校時代から面倒見ていることを知っていたと思うんだ。そして、彼の母校の早実に入れたんだな」

「人のつながりというのは、実に面白いね。プロ野球の歴史を変えたんだ」

荒川博は早実、早稲田時代から巧打者として知られ、1953年に毎日オリオンズに入団、開幕後間もなくライトの正選手になった。勧誘を直接受けた球団社長から「選手としてはあまり大きな期待をしていないから、優秀なコーチになるつもりで頑張れ」と言われたという。入団する時に選手よりコーチに向いていると言われた選手は彼くらいだろう。

それでも、荒川は9年間一線で活躍した。生涯打率2割5分、ホームランも16本を打っている。1961年に引退すると、翌年に巨人の監督に就任した川上哲治が打撃コーチに抜擢した。弱冠32歳だった。その後ヤクルトの監督を務めた。

呉が天性の野球選手なら、荒川は天性の打撃コーチだと言えるだろう。

「そう言えば、呉さん、荒川君、王の3人とも左打ちだね」

「いや、もう一人榎本がいる。あれはプロに入った時から完成した打者なんて言われていたね」

「うん、完成している。しかし、榎本もすごい努力家だよ。合気道なんかやって間を取る研究をしているとか」

「荒川君は選手以上にコーチとして抜群の才を持っているにしてもだよ、よくもあんな打法を王にやらせる気になったもんだ」

「そうだよ。前人未踏のチャレンジで大リーグにもあれほど高く足を上げる例がないだろう」

「もっとも、少しだけだね、足を上げることは別当さんもやっていたからね」

「オレはねえ、オープン戦で王が打席で一本足を初めて見た時、思わず笑っちゃったよ。滑稽に見えたんだ。

それがどうだ。終わってみるとホームラン王だ。オレは選手を見る目がないよ」

「オレだってそうだったよ。あれではピッチャーの球にタイミングを合わせられるはずがないってね」

「ところがだ、笑ったオレにもシーズン後半になると、王のフォームが美しく見えるようになったんだ」

「完成度が高くなってきたんだね。聞くところによると、春のキャンプの旅館で、彼が夜に何百本と素振りをやるもんだから、三日で畳に穴が空いたというよ」

「王は甲子園の花形選手で人気があったが、コーチ連中には投手としても打者としても中途半端だと見られていたらしい。水原監督はもうキャンプからさっさと打者にしてしまった」

「川上さんが前年に引退して、入れ替わりに王が入ってきたから、一塁手の後釜として育てようと考えたんだろうな。オレと違って見る目があった」

「しかし、最初の年はホームラン7本だけ、打率は1割6分だ。水原さんはよく90試合も使ったな」

ここで呉が口をはさんだ。

「あのアッパー気味のスウィングではピッチャーに揺すぶられると高めの球を打てないわな。荒川は3年間治らなかったフォームを変えるのに一本足に賭けた。彼は一本足がうまくいかなくても、下からすくいあげるような打法は治ると読んでいたと思うよ」

「それが、眠っていた素質と王の練習熱心で予想以上にうまくいったというわけか」

一座の中では最も口数が少ない呉が、珍しく、さらに言葉を続けた。

「オレはね、彼のホームランもすごいと思うけど、それ以上に打率2割7分に驚いたね。もっと上がるかもしれない」

「そうなるだろう。王は体つきがごついから不器用に見えるが、オレは反射神経がすごいのではないかと思う。

今年もあれほど内角をきわどく攻められたが、デッドボールを受けずにぱっと交わしていたものな」

呉が言った。「ロン。タンヤオ、サンシキ。ヨンパー、イックウニー、ザンパーズーは3900」
「えっ、オレが振り込みか。また呉さんのダマテンか。また、韋駄天の呉からダマテンの呉か」

「うまいこと言うな」

みんな笑った。夜は更けてもまだまだマージャンは終わらなかった。

王貞治は、1940年、中華料理店を営む中国人の父と日本人の母を両親に東京墨田区で生まれた。

王は早稲田実業では一年生から夏の甲子園に外野手兼控え投手として出場、その後も華々しい活躍をした。二年生の選抜では、当時珍しかったノーwindアップから投げる技巧派投手として、準決勝まで3試合連続で完封した後、連投で惜しくも完封は逃がしたが、全国制覇して選抜では初めて関東に優勝旗をもたらした。同じ年の夏にはノーヒットノーラン、三年生の春には2試合連続のホームランを打った。しかし、夏では東京都予選で敗退した。

その後、王は1974年までの13年間連続してホームラン王のタイトルを獲得、75年は阪神の田淵幸一の43本にタイトルを取られたが、翌年から2年にはタイトルを取り返して計15回のホームラン王になった。

引退するまで3割を切ったシーズンは5度だけで、首位打者のタイトルも5回取った。1973、74年に連続して三冠王になった。最優秀選手にも9回選ばれている。

80年に引退するまでの21年間に、通算868本のホームランを打ち、ハンク・アーロンの755本を抜いて新記録をつくった。王自身は、「大リーグとはピッチャーのレベルが違う」、「日本の球場は狭い」と言って、アーロンの記録と比較することはなかった。

ここで呉昌征から離れて、一つ挿話を入れることにしよう。胡蝶蘭の話である。この花は、華やかな色合いと優美な形をしているが、それでいて、どこか品がある。本当に美しい花だ。

呉の嘉義農林時代には、原生のままの花が摘まれて行商されていた。当時は医者など金持ちしか買えない高価な花で、野生の胡蝶蘭を摘んで原住民の行商人が得意先を回って売っていた。原生種が台東県で見つかったのは1920年代のことである。

話は私が取材で訪れようとしていた旅から始まる。

2008年1月下旬、私は嘉農校友会理事の陳明言氏に案内されて昼前11時50分高雄発、南廻鉄路線のジーゼル特急「自強」号に乗った。春節（旧正月）にまだ2週間あり、空席がある車内ではゆったりした旅心地を楽しんだ。

列車が台湾最南端の恒春半島を横切る頃、屏東県に入る。左手に連なる山を見ていると、ぱっと視界が開けて太平洋岸に出た。右手に青い海、左手に山を見る景色が続く。トンネルが多い。間もなく台東県に入る。この屏東県と台東県の山中で胡蝶蘭の原生種が発見された。

私が台湾胡蝶蘭の父とも言える陳明言氏から、旅の間に胡蝶蘭について知ったことは、次のようだった。

胡蝶蘭は海拔800メートル以下で季節風が当たる山深いところ、枝が打ちかわす樹木の幹に着生している。種子は風によって運ばれ、樹木のほか岩壁にも着生して発芽する。花は白色、ばら色、紫色で形や色彩ともに美しく、英語でバタフライ・オーキッドと呼ばれるほど蝶々に似ている。花は12月から翌年の4月頃に咲く。

発見された当時から、原住民によって採取された花は台南を中心に行商の商品として売られるようになった。

やがて医者など裕福な家庭の間で人気が高まり、乱獲が進んだために絶滅の恐れが出てきた。

1980年代、絶滅の危機に注目した陳明言氏は、すでに台糖の役員を退任していたが、顧問として台糖の技術者を集め、自らリーダーになって胡蝶蘭の温室栽培における開発に着手した。日本やヨーロッパの温室が調査され、温室における最適栽培条件について試行錯誤を重ねて10年後、温度、湿度、ファンの風速、加熱器、さらに窓の開閉までコンピューターで制御する自動化によって最適条件が得られるモデル温室を完成させた。台南の気候はクーラーの必要がなく、加熱も少なく済むのでコストに有利であった。

台糖による人工栽培は、原生種の乱獲を防いだことにとどまらず、台糖の新事業の発展を超えて、台南地方の経済振興に大きく貢献することになった。台糖による生苗の栽培により、転業や新規参入が240戸にも広がり、栽培面積は26万坪を超えた。その間、台糖はアメリカ、フランス、オランダ、日本の蘭展示ショウに出品し、どこでも台湾胡蝶蘭は賞を獲得、大きく人気を博した。今日では、日本、アメリカの二大輸出国を始めとして年間5千万ドルに達する台湾の主要輸出産品の一つになった。

私は胡蝶蘭にこだわりを持つようになり、その後、陳氏にお願いして新品種の研究をしている嘉義大学の温室と、江南の台糖が経営する栽培温室を訪問した。台糖の温室は、通路の両側100メートルに渡って巨大な温室がつくられている生産工場のような趣であった。

陳氏と私が乗る「自強」号は、14時18分に台東駅に着いた。旅の目的は戦後の台湾で野球復活のきっかけになったリトルリーグ野球について調査するためだった。

陳氏と私が乗る「自強」号は、14時18分に台東駅に着いた。旅の目的は戦後の台湾で野球復活のきっかけになったリトルリーグ野球について調査するためだった。

台東駅では県少年野球関係者の出迎えを受け、県議会の秘書長室に案内された。秘書長は県体育団体の役員でもあった。そこで、今を去る40年前に、日本から来た少年野球チームと試合をするために、台北に遠征した紅葉村の少年野球チームの一人を紹介された。タクシー運転手をしている彼の車で30分、私たちは紅葉村を訪ねた。

話は40年前にさかのぼる。舞台は台東県延平郷紅葉村。

村の小学校では、嘉義農林野球部出身の校長先生が校庭で野球を教えていた。使われるボールもバットも手製で、使い古されたグラブがいくつかあっただけだった。当時はどこでも娯楽設備が少なく、まして人口500人の村では、子供たちにとって野球は唯一の楽しみだった。

1968年のある日、子供たちに大ニュースが入ってきた。

台北に遠征してくる日本の少年野球チームと試合をするという話だった。都会と言えば、台東市しか知らない、旅行もしたことがない村の子供たちには、台北ははるか遠い大都会だった。それがバスに10数時間も乗って旅をすることになったのだから、大変な驚きだっただろう。

当時は、組織だった少年野球チームはなかったが、南部ではあちこちで少年たちの間で広場野球が行われていた。

他方、台北を中心とする北部では、会社チームがいくつか設立されていたが、外省人の間ではバスケットボールに人気があった。大陸から来た外省人には野球はまったく縁がなかったのである。しかし、北部でも潜在的に野球ファンが多かった。

こういう時代に少年野球を盛り上げようとした有為の士たちが、日本から少年野球チームを招く計画を立てた。

計画は1968年8月に実現した。

台湾主催者は関西リトルリーグ協会を通じて和歌山チームを招請したが、和歌山チームはアジア代表としてアメリカのペンシルベニア州で行われる世界大会に出場が決まっていたので、代わって関西選抜チームが選ばれることになった。この年、和歌山チームは世界大会で優勝した。

関西選抜チームは大阪南部のチームを中心に構成され、台湾に遠征することになった。大阪から台北までの航空運賃がまだ高い時代であり、選抜小学生選手の親は一人7万円の個人負担であるにも関わらず、この計画実現に応えた。日本がまだ豊かではない時代、当時、大学卒の初任給が2～3万円であったから親の個人負担は大きかった。優秀選手の中には経済的理由で参加できなかったこともあっただろう。当時飛行機にはファーストクラスとエコノミークラスしかなく、エコノミークラスが今日のように格安になったのは、1970年代中頃にジャンボ機の就航とともに中間のビジネスクラスが創設された以後のことである。参考までに、今日では大阪台北間の格安エコノミー運賃が5万円になり、大学卒の初任給は20万円になっている。

かくて、関西チームは台北に集まった台湾3チームと対戦した。

関西チームは苦戦し、紅葉村、嘉義、連隊（南部選抜）の3チームに対し、2勝3敗の結果になった。紅葉村チームには0対7、1対5で連敗した。

誰もが疑問に思うだろう。なぜ練習で鍛えられ、試合経験も豊富な関西チームが、用具にも恵まれていなかった、そしてわずか選手12人の紅葉村チームに連敗したのだろうか、と。

ある日、私は大阪南部に当時小学5年生で遠征に参加した元選手を訪ねた。彼の話はこうだった。

両者による協議の結果、台湾の少年が使ったことがない硬球の代わりに、公式硬球より小さいソフトボールが試合で使われることになり、出発の1か月前に送られてきたソフトボールに関西チームは馴染めなかった。それに関西チームはあちこちのチームから寄せ集められた急造チームであったため、戦力にバランスを欠いたこともあった。試合では投手がストライクを投げられず、また打者も紅葉村投手が投げる小さい球の芯にバットを当てられなかった。

後日、呉明捷の子息から送られてきたDVD『台湾野球、永遠のベースボール』では、なぜ関西チームが負けたのかという疑問には触れていなかった。DVDは1993年に大阪のテレビ局が現地取材して制作し、全国ネットのテレビで放映された番組だった。また、関西選抜チームではなく、和歌山チームが遠征したことになっている。これは紅葉村の少年野球博物館でも和歌山チームとしているので、このような間違いを招いたのだろう。

興業リスクを負った主催者の計画は、予想をはるかに超える人気を呼び、大成功を成し遂げた。台北の球場には8千の椅子席どころか、立ち席まで超満員になる1万5千人の市民で埋まった。台湾初の少年の国際交流試合はすべて有料だった。試合はテレビ放映もされ、市民の間に眠っていた野球熱が一気に爆発したようなものだったのである。

これ以来、台東県と大阪の間ではその後も試合が行われ、交流は今も続いている。

交流試合のニュースがテレビで報道されると、一気に機運が高まり、台湾各地にリトルリーグ協会が設立され、少年野球は全国的スポーツになった。野球は日本統治時代の文化遺産と見なし、関心を払わなかった政府も、一転して強力に支援するようになり、その効果は早くも一年で出た。

翌1969年には嘉義チームが台湾代表になり、アジア・オセアニア選手権でも日本を始め各国代表チームを破り、世界選手権に初出場した。嘉義チームの勢いは止まらず、さらに世界選手権でも勝ち進み、優勝した。用具にも不自由し、硬球にも経験が浅いチームが短期間に実力をつけたことは驚異的だ。

私は滞米時代に毎年生中継されるテレビでリトルリーグ世界選手権を観ていたが、84年には州の中部に位置する人口3万6千人の町ウィリアムSPORTまで開会式の日には観戦するために、車を4時間飛ばして出かけた。この年は韓国ソウル代表が優勝した。

世界選手権専用球場の立派さに驚かされたが、それより驚かされたことはチーム別に寝泊まりするコテージ群に加えて食堂からプールまで緑の中に施設が備わっていることだった。

選手一行が緩やかな丘陵の間を走るハイウェイをバスで移動し、田園地帯の真ただ中にあるウィリアムSPORTに入った時には景観の美しさに魅せられただろう。随行のスタッフも、「こんな田舎の町にリトルリーグの本部と専用球場がある！」と驚いたに違いない。

選手たちは一回戦で負けてもここに一週間滞在し、他チームの選手たちと交流する。毎日、テーブル一杯に並べられた料理から好きな料理を食べられる。初めてここに滞在した嘉義チームの選手たちには夢のような生活だったろう。

優勝した嘉義チームが帰国すると、台北でも嘉義でも何万人もの群衆が凱旋パレードを出迎えて歓迎した。蒋介石総統とともに記念写真を撮られる栄誉にも浴した。台湾中が興奮に包まれたのだった。間もなくして、台湾で使われる1000元、500元、100元の紙幣の一つ、500元札の裏に優勝チームの写真が採用された。

台湾訪問中のある日、20人ほどの昼食会に出席した時、同席した陳明言氏が、「皆さんの中で、500元札の裏に少年野球の写真が印刷されていることを知っていますか？」と尋ねた。すると、3人だけが手を挙げた。そこで私が冗談を言った。

「なるほど、皆さんは1000元札しか財布に入っていないのですね」

すかさず、座の一人が返した。

「いや、100元札しか入っていません」

これで大笑いになった。

次の年はアメリカ代表が優勝したが、翌71年から74年まで南部の台湾チームが世界選手権に4連勝した。さらに77年から81年まで5連勝して台湾チームの黄金時代が続いた。この間、上級の中学生リーグ（ビッグリーグ）でも台湾チームは世界チャンピオンになっていた。

私は家族とともに当時ペンシルベニア州の西北部にある町に住んでいた。人口2万人の小さな町でもリトルリーグ野球は盛んで、地域には10チームがあり、世界選手権に東部代表として出場するために、町のオールスターチームが結成されて他の町のチームと週末に延々と対戦していく。台湾チームが連勝し始めると、

「台湾チームは大きな地域か、全国選抜のオールスターではないか」、「体格が大きいから年齢オーバーだろう」などとコーチ仲間の間で噂話がされていた。その真偽はとにかくとして、後年、台湾では台北や高雄の大都市では市内がいくつかの地域に分割された。

台湾では、台東と嘉義が少年野球発祥の地として、唱えている。これに対し、私が現地調査をした結果によると、両地ともに発祥の地を分け合っていると言えるだろう。

先ず、台東・紅葉村は関西チームに勝利したことにより、その名を全国に知られることになり、それまで少年野球を熱心に行っていたことで、台湾の「少年野球」の発祥地であることは間違いがない。他方、嘉義はいち早く地域のリトルリーグ組織を設立、台湾で初めてリトルリーグ世界選手権に優勝したことから、「リトルリーグ野球」発祥の地であると言えよう。

こうして少年野球が台湾の国民スポーツになっていく60年代には、他方、台湾の会社野球も50年代から静かに、しかし、着実に発展し、日本との野球交流が増えていた。

早稲田、慶応の大学チーム、当時社会人野球の強豪であった日本石油、熊谷組などの会社チームが訪台して台湾の会社チームと対戦した。

さらに、68年2月には日本シリーズ3連覇を成し遂げた川上監督が率いる巨人軍が訪台し、台北と台中で会社チームと3試合を行った。野球人気が高まりつつあった時、どの試合でも球場は超満員の観衆で埋まった。

巨人軍の強力打線は13本のホームランを打ち、すでに6年連続ホームラン王の王貞治も3本放った。王は広東省出身の父を持つ在日二世で、戦後親が中華民国の国籍をそのまま続けたことから台湾籍であるため、台湾の英雄として大歓迎を受けた。その後、川上巨人軍は9連覇、王は13年連続でホームラン王になった。

呉昌征が野球界から引退して10年が経っている時代である。なかなか満足を得られない会社員としての生活を送りながら、台湾の野球事情には関心を払っていた。彼の親友になり、交流が続いていた中華料理店の柳文明も同様だった。大阪の台湾人社会でも台湾の少年野球の活躍に大喝采を送っていた。

呉も柳も、そして大阪の台湾人も、日本のチームより台湾の少年チームを応援した。彼らには、一世であれ二世であれ、台湾の出身地がどこであれ、台湾チームは故郷につながっていた。それは、大阪に出てきた地方出身者が、甲子園大会では、大阪の高校より彼らの故郷代表の高校を応援する心情と同じことだった。

呉昌征の物語に戻ろう。

1979年に嘉義農林専門学校は開校60周年を迎えた。

その記念行事の一つとして、呉は講演に招かれた。

11月に一週間、三度目の台湾訪問をした。成田空港が開港した翌年だった。初めて成田空港から飛び立った時から、何を学生に話すか、何度も何度もメモを書き加えた。呉にはこれが最後の台湾訪問になることが分っていた。63歳になっていた。

台湾訪問が決まると、誰よりも妻が喜んでくれた。「お父さんには、久しぶりの晴れ舞台だね」と、子供たちも嬉しそうだった。

《そう、オレにとっては野球界を引退してからというもの、ろくなことはなかった。それを家族も感じていたのだ》

長男も長女も、最近よく励ましてくれていた。

「お父さん、もう働くのはいつ止めてもいいよ。十分に努力してきたんだよ。もう定年退職の歳になったのだから。じいさんとして孫と楽しんでよ」

「定年退職者の生活か。そうだな、隠居生活に入るとするか」

「そうそう、隠居じいさんの悠々自適生活ですよ」

《うん、オレは良い嫁さんと家族には恵まれたな》

独り言を繰り返すうちに、飛行機が台北中山空港に着いた。出迎えの校友会幹事とともに、台北駅から縦貫鉄路の特急で台南に直行した。

一日姉や弟に会い、休養すると、翌日、嘉義農林の講堂で壇上に立った。

日本の戦前のプロ野球草創期から、選手としてのキャリアを淡々と話し終えると、講演の締めくくりに入った。

「私は、42歳で野球界から引退しました。その前には助監督もやりました。助監督というのは、大変難しい職で、強く表に出ると監督のリーダーシップに入り、目立たないようにすると仕事をしていないように見えます。別当監督も優しいリーダーでしたから、言うなれば、監督も私も地味なタイプです。私は身の置き方に苦労しました。助監督という職は、その後、日本のプロ野球では置かれませんでした。

助監督をしていた頃から、野球界を引退する決心を固めていましたが、それから2年間はスカウトに任命されました。給料はもらえるし、時間は自由に取れるので、この間に引退後の仕事を探すことにしたのです。

結局、いくつか仕事の口があり、引退しました。

私は、野球とは関わりがない普通の仕事に就き、普通の人になることを、強く望んでいました。

ところが、引退した野球選手が普通の仕事に就くことは、本当に難しいものです。最初はスポーツ用品の販売会社に顧問として雇われました。野球で多少知られた呉昌征の名前を貸したようなもので、仕事は営業マンに付いて時々お客を訪問するだけで、責任を持つ普通の仕事は与えられませんでした。大した仕事をしないのですから、給料に贅沢を言えませんが、家計を支えるには足りません。

次に、台湾との貿易をする会社取締役として迎えられる話があったので、こちらに転職しました。世の中にはなかなかうまい話はないものです。取締役になるのに、相応の出資を求められて金を出しました。

相手は業績を立て直すのに資金が必要だったのです。会社の業績に関する決算書だの、貸借対照表だの、事前に調べたところで、私にはよく分かりません。それに台湾出身で元プロ野球選手、呉昌征の名前も役に立つと思われたでしょう。

考えてみてください。私は台湾語を片言しか話せない、まして北京語はまったくダメです。台湾の人脈も期待されたかもしれませんが、私の人脈と言っても、幼馴染みか、嘉義農林の仲間くらいなものです。商売の経験もない。これでは会社の業績を改善するために役に立ちません。（会場に笑い）

結局、この貿易会社は倒産して、私は失業しました。

その後もいくつかの仕事をしましたが、給料が安く、長続きしませんでした。この間、子供たちの教育費がかかるようになりました。しかし、妻が野球選手時代の貯金を管理していたのと、彼女がフルタイムの仕事で働いてくれたので、子供を大学まで出したのです。選手時代の収入を私に任されていたら、首つりをする事になったかもしれません。（笑い）

まだあります。友達から連帯保証人を頼まれ、深く考えもせず印鑑を押したことがあります。その友達は行方をくらましてしまったので、私が彼の借金をかぶる破目になりました。危うく家を取られそうになりましたが、妻と妻の実家からの支援を受けて助けられました。

皆さん、なぜ私がこういう恥ずかしい話をしたのでしょうか。

それは、学生諸君にプロ野球選手の陽が当たる面だけではなく、影の面も知ってもらいたからです。

引退後のプロ野球選手として、私はまだ恵まれている方だと思います。少なくとも最優秀選手に選ばれ、首位打者や盗塁王も取り、能力を発揮できたからです。

プロ野球選手になっても、力が足りなかった、故障や怪我で挫折した、機会に恵まれなかった、などで引退を強いられた選手の方がはるかに多く、成功する選手はほんの一部と言ってよいでしょう。さらに、引退後も監督や解説者として生き残った選手はもっと少ない。こういう厳しい世界なのです」

呉はここで一息つくと、話を続けた。

「私が20歳の時に、巨人に入団することを決めようとしていた時、母親が『野球を続けたいのなら、台糖で仕事をしながら会社野球部に入ればよい』と強く勧めました。普通の仕事をして普通の人になることが母親の願いでありました。

私はずっと母親の言葉を忘れたことがありません。しかし、いつも気にしながらも、その準備を先延ばしにしたままで引退の日が来てしまったのです。

普通の仕事をするには勉強が必要です。ところが、私が勉強したのは嘉義農林の5年間だけで、それ以来勉強をしたことがありません。これでは普通の仕事をやれないのは当然です。

最近、高校野球でもプロ野球でも、『自分には野球しかない』、あるいは『自分から野球を除いたら何もなし』という声をよく聞きます。まあ、野球に集中する覚悟を述べている面もあるのだと思いますが、あまりに将来の長い人生を送るには不用意です。私も、毎年試合に集中し、長期的に将来を考えると、来シーズンをどうやるか、くらいしか考えなかったものです。

この中にも野球部の選手がおられるでしょう。野球の熱病に取りつかれると、もう治らないから、どこまでも野球を続けたいでしょう。

そこで、呉昌征の成功談より、失敗談から教訓を学んでほしいと思います。

最後に野球部や他の運動部の選手たちに二つのアドバイスをして私の話を終えることにします。

まず、野球をやれば勉強では人に遅れます。遅れてもよいのです。大切なことは、机に向かう習慣を決して絶やさないことです。野球選手生活には限りがあり、人生は長いのですから。机に向かう仕事ができないと、引退後の就職口が狭くなってしまいます。

そして、元野球選手は会社や他人に使われにくいものです。ですから、単独でレストラン経営や商売の事業を持とうとします。当然、リスクがあります。レストランをやるなら、例えば、南部の台湾料理を看板にすることによって特徴を出す必要があるでしょう。（笑い）

プロ野球界の常識には世間からずれていることもありますが、社会人として常識も身につきます。しかし、常識の勉強を超えて、秘かに会計士、税理士、プロのシェフなどの専門職を目指す道もあります。私はえらそうなことを言えませんが、片手間の勉強が野球への集中力にマイナスになるとは思いません。

二つ目は、人生は長いことに加えて、人生には選択が多く与えられるということです。野球に限って言えば、プロ野球選手だけが選択ではないことです。あの嘉義農林が甲子園で準優勝した時のチームで、英雄の一人であった呉明捷さんは、東京六大学で在学中にホームラン7本を打つ新記録をつくり、首位打者にもなった強打の一塁手でしたが、会社に就職した後は野球から離れました。嘉義農林ではピッチャーだった彼は身長180センチの恵まれた体格でプロ野球でも成功したと確信していますが、プロ野球には行きませんでした。六大学野球で活躍した名選手でプロにならなかった選手はほかにもいます。

六大学で55イニング無失点記録を持つ選手が、野球部がない会社に就職し、早々と野球を止めた例もあります。人生はいろいろ、なのです。

野球部や他の運動部の選手諸君は、少なくとも一つ事に打ち込むことを知っています。選手を止めても、一つ事に打ち込む経験を生かすようにしてください」

呉はここで感無量になったのか、言葉に詰まった。それからおもむろに話を続けた。

「原稿から外れて時間オーバーになってしまいました。最後に、皆さんの前で話す機会を与えていただいた母校に感謝します。嘉義農林と故郷は私の心の支えでありました」

万雷の拍手を背に受けて、呉は舞台を後にした。彼は最後の晴れ舞台に満足の気持ちでいっぱいだった。

台湾から帰ると、久しぶりに気分が良くなった。台湾で晴れ舞台の機会を与えられたせいもあるが、生き方に踏ん切りがついたからだった。

先ず、帰化の申請をした。日本人としての名前は妻の姓を取って石井昌^{まさゆき}征にした。これで《家族全員が日本人になった》という感慨を持ったが、《家族の中ではオレだけが台湾籍だったのだな》といまさら認識を新たにした。

気持の上では何も変わりがなかった。《なぜ今まで帰化に踏み切れなかったのか?》と不思議にさえ思った。

自称じいさん業に専念する生活は新鮮だった。幸福な気持ちで一杯だった。町田の自宅のすぐ側に住む長男宅を訪ね、孫と遊ぶことが楽しみになった。西荻窪に住む長女の家族もよく訪ねて孫の相手をした。一時病弱になっていた妻の家事も初めて手伝うようになった。食器洗いでは時々いい加減な洗い方に苦情をもらったが、お役御免にはならなかった。打席に立つ時のように、集中力を込めて洗うことが楽しくなってきた。

最大の楽しみは、孫を引き連れて後樂園に野球を観に行くことだった。巨人阪神OB戦に顔を出していた王貞治と会った時から親しくなっていた。彼は、いつでも巨人戦の切符を用意してくれた。さすが阪神戦のカードは超満員になるので遠慮した。彼自身、かつてプレーした阪神の試合にはこだわりの気持ちがあったかもしれない。

王はいつも親切だった。台湾籍同志のよしみもあったかもしれないが、むしろ巨人の大先輩として尊敬の念を持たれていたのだろう。

呉にとって、巨人阪神OB戦も楽しみだった。巨人からの招きで巨人のユニフォームを着て出場したのであるが、試合前にかつての阪神時代の同僚から冷やかされた。

藤村は、「おいおい、呉さんよ、あんたはこっちのチームじゃないのか」と言ってからかった。

OB戦に出る度に、古いチームメートを思い出さずにはいられなかった。戦地で負傷して投手としてカムバックできなかった沢村栄治は三度目の出征で戦死、名捕手の吉原正喜はわずか4シーズンで出征して戦死、戦後も長く選手生活をしたスタルヒンは車を運転中に踏切事故で死亡、みんなの顔が浮かんだ。中でも沢村の顔と足を高く上げるフォームは忘れられない。悲運の投手沢村が、毎シーズンに最高の成績を挙げた投手に与えられる「沢村賞」に、名を残している。

赤バットの川上哲治は引退後巨人の監督になり、元気そのものだった。《川上さんはオレより1年遅れで巨人に入ったから、20年間の現役か。彼もオレも幸運に恵まれたな》と、何度思ったことか。

人並に平穏な呉が言う定年退職生活の日々が過ぎていた。そんな平穏な生活に突然不幸が彼を襲った。

1986年の二月と三月には東京によく雪が降った。二月に7日、三月に5日も降った。三月初め、気温が下がって、朝起きると、一面に雪が積もっている銀世界だった。その美しさに魅せられて玄関の戸を開いて外に出た。感激していたせいか、不用意に最初の一步を踏み出した途端に、大きく転倒した。積もっていた雪の下が氷盤になっていたのだった。

腰を強打して動けなかった。立つこともできなかった。救急車で病院に運ばれ、診断の結果は尾骶骨とその周辺の複雑骨折だった。そのまま入院して手術を受けた。リハビリを続けた後、ようやく車椅子で動けるようになって退院したが、それ以上に病状は良くならなかった。二度目の手術を受けても回復しなかった。他の病院にも通った。

呉は、家族に「病院はもういい」と言って、それ以上の治療を望まなかった。

翌年になると、下半身が麻痺し始め、寝たきりの生活になった。野球選手であった彼には身体の自由が利かなくなったことは、常人以上に辛いことだっただろう。それでも腹も立てることなく、愚痴一つも言わずに耐えた。

彼は、「オレの強運も尽きたか。今までの強運の貯金を全部おろしたようなものだ」と、冗談半分に家族に言った。また、《もうカンノンリキも神通力を失ったな》と独り言を何度も言った。家族には何のことか分らなかったが、彼が急に気力を失っていくようだった。

テレビでプロ野球を観ることが最大の楽しみだった。

読書にはすぐ飽きた。友達から自叙伝を書くことを勧められたこともあるが、書く気にはなれなかった。

よく夢を見た。頭は正常であったが、昼間にうたた寝して見る夢の世界は幻想のようであり、時にうなされることもあった。

「橋仔頭の神社の桜は今も咲くかな？」と寝ぼけ眼で病室の付添いをしていた和子に問うたことがあった。「あんな暑いところでも桜は咲くの？」と和子が答えると、呉は「寝ぼけていたのだよ」と笑って言った。

それは桜ではなく、台湾では羊蹄甲と呼ばれるマメ科の木だった。十月に桜によく似た花が咲く。台湾に一度も行ったことがない和子に、台湾の話をほとんどしたことがない呉が、珍しくていねいに説明した。実際、彼は家族に母校や台湾のことを話すことがなかった。そのため家族は嘉義農林が野球ばかりやらせる野球学校だと思っていたという。おそらく、呑気な性格の裏には、家族に台湾人であることを意識させないように、こまやかな気遣いをしていたのかもしれない。

両親の夢もよく見るようになった。夢から覚めると、死に目に会えなかったことを悔いた。父親は彼が28歳の七月に、母親は36歳の八月に亡くなったので、シーズンの真っ最中だった。葬儀にも出られなかった。せめて母親が生存中にシーズンオフなら台湾に行けたはずだ。ずるずると先延ばししたことが悔やまれた。《今さら悔いてもしようがないな。しょせん、人は悲しみと後悔を背負って生きているのだ》と独り言を口に出した。涙が出た。

交通事故で亡くなった弟の天昌の夢も見た。可愛がっていた弟で、訃報が来た時には、めったに泣くことがない呉は、家族の前で泣いた。

橋仔頭の家側に立っていた楠の巨木もよく夢に出てきた。

《子供時代に近所の友達とよく木登りをしたものだ。あれは故郷に帰った時にまだすっきりと立っていた。懐かしいな。そうか、オレには故郷が本籍だな。台南が本籍の日本人か》

ある日、何十年も考えてきた《オレは何者か?》という自問に答えを出せるように思った。《オレは家族の長。これが第一だ。野球選手、祖国、台湾人、台湾系日本人のどれも家族の長を形づくっているオマケみたいなものだな》と得心した。

生涯を振り返った。

《オレは生涯何度も決断をしてきた。いや、人に勧められるままに決めたことが多かったな。大それた決断をしたという記憶はない。いつも不安にたじろいだが、結果は幸運に恵まれてすんなり行った。戦前、戦中、戦後にわたって困難な激動の時代だったが、生活に困ったり、命を脅かされることはなかった。オレはお人良しの性格で、頼まれると会社に出資したり、連帯保証人になって蓄財を失ったこともあった。家族には何も資産を残してやれなかった。しかし、オレはやはり強運の男だったろう。信仰とは縁がなかったが、「念彼観音力」をいつも唱えたもんだ。神にも感謝しなければならないな》

夢か、夢ではなかったか、甲子園のことを思い出していた。また涙が出た。

《何度も通った長い船旅は疲れたな。あの巨船に何度乗ったか、行き帰りで8回、それに巨人に入る時にも乗ったから9回か。甲子園球場に練習で初めて入った時にはでかさに驚いた。入場式の満員のスタンドには圧倒された。ガーンとくる感じだった。

そう、オレの人生は甲子園から始まったのだ。勝っても負けてもみんな甲子園を目指す。一体、甲子園は何なのか。まるで魔性が潜むとはうまく言ったものだ。タイガースに移ってからの終戦の年だったか、あれは。あの甲子園の外野を芋畑に変えるのにオレは現場監督をやった。今から思えば信じられないな。甲子園農場だもんな》

涙ぐんでいた呉が笑い顔になった。

《野球だって魔性だ。一度執りつかれると離れられない。オレも長い野球人生を送ってきたな。野球界から離れてからは苦しかったが、今となっては人生のオマケだったのか》

急に彼の口から歌が出てきた。長い間忘れていた嘉義農林の校歌だった。

「『浮かべる雲の富、省り見ずて、汗に生きるが、我等の願い、一木植うるも、一粒撒くも、誠の吹息を込めるが誓い』。この三番は好きだった。待てよ、一番を思い出せない。ええと、『新高山の西、沃野千里——』」

次の歌詞が出てこなかった。ここで枕が少しずれた。橋仔頭の公園、お祭り、阿里山、母校の情景がめまぐるしく頭を駆けめぐった。

突然、川の激流の中で車を必死で運転していた。助手席に妻と子供たちがいた。《オレはお前たちを守るぞ》と叫んだ。車が陸に駆け上がると、がらっと情景が変わった。

彼は気を失った。彼の身体がきりもみ状態になると、甲子園のセンターから上空の雲の中に昇っていった。

急性心不全に襲われた呉が静かに息を引き取ったのは間もなくだった。

死の二日前、彼は妻の手を握り、「ありがとう」と言ったという。それから彼は死を望んで覚悟していたに違いない。生きる気力を失ったというより、家族の長として家族を重荷から救ってやりたいという気持ちだった。食慾も無くした。自殺ではないが、死ぬことを念じて最後の気力を込めていた。

この年、1987年6月28日、夜の11時に静かに息を引き取った。心臓に持病を持たなかったのに、死因は心不全と診断された。享年71。

呉が苦痛から解放されたことにほっとしたのか、家族は誰も泣かなかった。家族が泣いたのは葬儀に入ってからだった。

彼は日本の土になったが、魂は日本の家族、台湾の家族、オールドファン、みんなの心に生きている。魂に国境はなかった。

呉昌征は戦前の日本プロ野球草創期から戦後の復興期までの20年間、常に一線で活躍し続けた第一級の選手だった。巧打、好守、強肩、俊足の選手として彼を飾る言葉は多い。生涯打率.272、381盗塁、21本塁打、その上投手として31試合に登板、15勝7敗、防御率3.81の成績を残した。彼は台湾出身選手第一号という以上に、日本のプロ野球が今日あるまでに草創期から復興期を支えた功労者であった。

1995年、7月26日、快晴のもと、横浜スタジアムで行われたオールスター・ゲームの開始前、この年に殿堂入りした杉浦忠(南海ホークス投手)らとともに式典で表彰され、故人に代わって石井和子夫人が出席した。夫人には掲額の肖像レリーフと賞金100万円が贈られた。

満員の観衆の前で、夫人はどんなに晴れがましい思いをしたことか。呉の晩年は寂しかったが、野球にうとい夫人は、「やっぱり、夫は偉大な選手だった」と感慨を新たにしたらう。

彼が戦前戦後を通じてプレーを共にした同世代の中で、殿堂入りした選手には、水原茂、三原脩、鶴岡一人、若林忠志、別所毅彦、川上哲治、藤本定義、藤村富美男、大下弘、白石克巳、別当薫、千葉茂などがいる。

表彰式から2週間後、お盆の前日、和子は長男昌博夫婦に伴われて、市川にある智泉院まで夫の墓参りに出かけ、殿堂入りの報告をした。長い間、数珠を持った両手を合わせて何か語りかけているようだった。目に涙を浮かべていた。

「何を話していたの？」

と、問う長男の昌博には笑って答えなかった。

和子は、お互いに苦労した引退後の生活を思い出していた。和子には、夫は偉大な野球選手であるよりは、満たされることがなかった引退後の生活でも、病床に伏してからも、一度も腹を立てることがなかった大人^{たいじん}であった。悲しみより、夫への懐かしさに涙したのだった。そして、

「今、私は家族に恵まれて幸せな老後の生活を送っています」

と、報告した。

なぜか呉昌征の殿堂入りは遅れた。私は台湾出身であることの差別より、野球関係者や人々からも運悪く忘れられていたことによるものと推測している。それでも、この時期になって選出委員の誰かが呉昌征の名前を思い出したことは救いだった。彼が野球界から引退して37年、死後8年が経っていた。

殿堂表彰には競技者表彰と特別表彰の二種類がある。

参考までに、規定を掲げてみよう。

競技者表彰の対象は、「選手を引退後5年以上、15年以内」、対して、特別表彰は、選手、監督、コーチ、審判員から、組織または管理に関して野球の発展に顕著な貢献をした者で、引退後17年以上」とされる。

呉は引退してから37年になるので、この規定により特別表彰とされたのである。しかし、野球殿堂に掲げられている肖像の掲額では区別されていない。

私は台湾から日本に帰る飛行機の中で、《殿堂入りが生前に行われていたら、彼はどんなに喜んだか》と思った。

呉昌征が生きた時代を振り返っていた。メンコで彼に出会ってから半世紀、自身こんなに過ぎた時代について考えることはなかった。野球選手に限らず、スポーツ選手にとって、それどころか万人誰でも、現役を引退した後の人生は難しいものだ。まして英雄にとっては、もっと難しい。英雄が生涯英雄であり続けることはほとんどあり得ないものだ。

呉昌征が1987年に亡くなってから21年、野球界にとどまらず、台湾全体が大きく変わった。彼には想像もできなかつたろう。台湾の野球界と社会に起きた変化をいくつか挙げてみよう。

1988年、優勝した中日ドラゴンズの郭源治が、最優秀救援投手と最優秀選手に選ばれた。郭は日本のプロ野球選手として、呉の20年間に次ぐ16年間にわたって活躍した台湾出身選手だった。また、最優秀選手に選ばれたのも呉に続いて二人目だった。

彼は、呉と違い、中日ひと筋、地元の名古屋人になり、名古屋で台湾料理店を経営している。

1990年、呉が熱心に提唱した台湾職業野球が設立された。日本の元プロ野球選手が何人も監督やコーチとして招かれ、台湾プロ野球の発展に貢献してきた。毎日オリオンズで呉のチームメイトであった山内一弘もその一人だった。

1995年、今日メジャーリーグで活躍する日本人選手たちの先駆けになった野茂英雄が、ドジャースに移籍した。この年13勝を挙げ、新人王と奮三振王に選ばれた。それから10年後の2005年、台南出身の王建民がNYヤンキースのマイナーからメジャーリーグに昇格、8勝する。翌年には19勝を挙げて最多勝投手になった。

1996年、台湾人の国民党総裁になった李登輝が初の直接選挙で総統に選ばれた。2000年には、台南出身の陳水扁が総統に選ばれた。国民党以外の政党、民進党から選ばれた初めての総統になった。

2000年、国立嘉義師範学院と、かつての嘉義農林である国立嘉義技術学院が合併して、国立嘉義大学になった。2007年には嘉義大学野球部が、国立大学として初めて全国アマチュア野球選手権大会で優勝した。

嘉義大学では、入学願書にも学籍簿にも、出身の省を書く項目を廃止している。従って、互いに出自を話さなければ、本省人か外省人の子女であるかはわからない。中国の歴史において、個人がどの省の出身であるかは、長年に渡って重要な伝統であった。しかし、今日の嘉義大学では敢えて伝統の壁を破ることで、台湾人、原住民、日本人の三者一体の近藤精神が形を変えて、台湾人、原住民、外省人の新たな三者一体が生きている。

2008年5月、3月の総統選挙で選ばれた国民党の馬英九総統政権が発足した。馬総統はホンコン生まれの外省人二世で、ハーバード大学卒業、台湾語も話せる。

国民党が国会の多数派になり、総統も国民党であることを危惧する意見を聞くが、別の見方をすれば、かつて少数派外省人の政党であった国民党が台湾人化されたのである。二大政党が親の出自ではなく、政策で争われる時代になった。

政権が選挙で交代する台湾の二大政党による民主主義の成熟度は、世界の先進国と肩を並べた。

今、台湾にはもはや古い民族的対立も宗教的対立もほとんどない。台湾が事ある度に、ホンコンやチベットと比較されることは、台湾の人々にとって不本意であろう。台湾は国土、人口、経済力において、かつて支配したオランダと肩を並べる大国の一つである。海洋通商国家というものは、実体より小さく見えるものだ。

呉昌征とともに歩んできた人生の長い旅が終わろうとしている。

それは1931年から始まったが、今、2008年は甲子園には特別の年だった。全国中等学校野球大会から歴史を刻んで、春の選抜大会は第80回、夏の大会は第90回を迎えた。

8月2日、三塁側内野席では、嘉義農林・嘉義大学校友会のOBたち約50人が開会式の選手入場を待っていた。嘉義大学は来年、嘉義農林創立から開校90周年に当たり、記念行事が始まっていた。甲子園での観戦もその一つだった。

彼らの中には戦前甲子園に出場した選手も含まれていた。しかし、1996年に校友会のグループが夏の甲子園大会を観戦するために訪れた時、準優勝チームで唯一の生存者として参加した蘇正生は、今回98歳の高齢であるため参加できなかった。この時、一同は近藤兵太郎監督の墓参のため松山を訪れている。

今回も一行は松山を訪れ、近藤監督の墓前に花束を捧げて遺族とともにお参りした。なんと律儀な人たちだろうか。

現在、甲子園球場は三カ年計画でシーズンオフに大改修される初年度の工事が終わり、内野席の座席は肘掛も背もたれもある大リーグ球場並に改良新調された。大銀傘とともに甲子園球場のシンボルであった正面の外壁を張っていた蔦が取り払われていた。現在、阪神電鉄が全国の高校に蔦の苗木を贈り、その中から生育した蔦を200校以上の高校から里帰りさせて、元の姿に復元するという。

入場行進が始まった。野球選手の経験者であろうとなかろうと、この時には誰もが感激する。オリンピックの入場式のように色彩豊かではないが、甲子園の入場式は一味違うものだ。

第一試合が始まると、一行の集団の一隅に嘉義農林の校旗を掲げ、赤い小旗を振って応援した。彼らには、目前でプレーする日本の高校生が、ずっと昔の嘉義農林の選手たちだった。彼らの網膜には呉明捷や呉昌征の雄姿が映っていた。

甲子園球場に入る時にも校旗を先頭に行進する彼らの中で、赤い小旗を持った私は、しばし戸惑いを感じていたが、今は彼らに同化していた。私の網膜にもかつての名選手たちの姿が映っていた。1931年の夏、嘉農チームが中京商業と決勝戦で戦っていた。

第一試合の半ばで席を立ち、高校野球でもプロ野球でも内野席からしか観たことがなかった私は、ふと思い立って球場を一旦出ると、無料の外野席の入口からバックスクリーンの横に立った。満員の観衆は色とりどりのシャツを着ていて、昔のように、戦後私が中学生時代のように白一色ではなかった。外野からはアルプス席に陣取る両校のブラスバンドの演奏が聞こえてくる。リーダーに統制され、色分けされた応援の様がよく見えた。

球場全体が膨れ上がっていた。《甲子園は本当にでかいな》と思った時、突然、人を引き付けずにはおかない魔性のような力を感じた。少年野球選手から高校野球選手まで、甲子園を目指す。呉昌征が目指した時代から今も変わらない。

あれは紛れもなく魔性だった。

(完)